

を帯び、北に小貝川を控ゆ。最も水運の便に富みて、貨物の聚散も繁く商業活潑なり。ことに呉服商及び雜穀商等多く、製絲の業また盛に行はる。また町内富豪商多きを以て、店舗宏壯に街衢整正なり。人口約七千、下總國內の一繁華區に算せらる。縣立中學校を始めとして警察署、郵便局等の設置あり。字御城と呼べる地に城址あり。古へ田村彈正なるもの、據れる所と稱し、同人の遺跡を字八間に止めたり。俗に稱して彈正塚または鎧塚といふ。相馬日記にこの町のことを記して曰く「そもく水海道といふは、昔平將門が相馬の偽内裏造りしをり、相馬郡大井の津をもて京の大津に比べし由將門記や今昔物語に見えれば、此所がその跡なるべし。後世推移りて豊田郡につきたり。御津とは官津の名にて難波の御津なども同じ。さて東の國には路のことを總て海道といへば、この御津も道路のちまたなる里ゆる御津海道といひしを、今水海道と書くは假文字にて、里人の必ず水を澄みて呼びならへるも由あることなり。」

水海道より東京へ出づるには北相馬の守谷町を経て取手驛より常磐線に乗すべし。その間守谷町まで三里二十

六町、取手驛まで五里十町餘を有す。取手驛に至る沿道附近に阪手營址、内守谷城址、城山権現碑等あり。守谷、取手兩町附近は既に常磐沿線地方の部に於てこれを詳述せり。

●飯沼弘經寺 ●水海道町の北一里、豊岡村の飯沼と稱する地にあり。浄土宗關東十八檀林の一に班し、界隈の名刹たり。應永二十一年横會根の城主羽生經貞及び羽生の城主羽生吉定等の檀越として創建せしところに係り、開山を嘆譽良肇上人と稱す。本堂以下の伽藍巍然として老樹蒼翠の裡に峙ち、風景また佳絶なり。相馬日記卷二にいふ「門の松杉道を夾みて青々と見わたさるゝ中に、名號櫻の薄紅葉して所々に生ひ交れるさま得も言はず。名號櫻とは祐天僧正の六字の名號書れしを賜はりてその酬に奉れる櫻なり。むかしはこの邊りに飯沼とて、たてぬきに七里ばかりの沼ありけり。なほ傳説に祐天僧正若うしてこの寺に住し、怨婦累が惡靈を教化したる物語を傳ふ。元和年間、徳川秀忠の女壽院はこの寺に隱退して今にその墳墓をとむ。現存の方丈は即ち當時の吉御殿を移築したるものなりといふ。横會根城址は同村大字横會根にあ

り。文明年間羽生民部の占據せしところといふ。その他附近に飯沼城址あり。親鸞上人の遺跡聞光寺あり。

五五六

雁島 日本名勝地誌曰く「雁島は飯沼の水中にあり。然れども平常にこれあるに非らず。唯秋初鴻雁來賓の頃自然水上に浮出する者にして、初めは凡そ十疊ばかりの廣さをなし、後漸次大となりて四五十疊許に至る。而して鴻雁の去るに及べばその島また次第に沈み、全く跡を止めず。恰も鴻雁の來宿に便するが爲め故らに生ずるが如きを以て、世に雁島と稱へ、また俗稱して浮沈の島と名く。蓋し、菰蘆葦荻の根自ら水底に盤結したる者時に隨ふて浮沈しこの奇觀を爲すなり。」

累墓 飯沼弘經寺の東羽生村の法藏寺にあり。寺門を入りて右側に百姓與右衛門歴世の墳墓累々として併立す。その中歸眞理屋性貞信女承應二癸巳天八月十一日の銘鏝あるもの即ち累の墓石にして、單到眞入童子云々の銘あるもの累の兄助童の墓なりといひ、他に與右衛門の娘菊女の墓石には榮譽不生妙樂の鏝あり。累の怪異談は世の普

ねく知るところ、與右衛門が累を殺せしと傳ふる溝渠は、法藏寺前より鬼怒川の西岸に沿ひ、飯沼村に至る途上、渠の鬼怒川に會するところによりあり。名けて累が淵といふ。

大生天満宮 菅原村大字大生にあり。菅原道眞の第三子常陸介景行が父の靈を祀るところと稱す。中世北條氏政が常陸の下妻城を來り攻めし時この社頭に屯し兵燹にかゝりしが、後下妻城主これを築造す。今も神橋の擬寶珠に城主多賀谷氏の姓名を鐫れり。なほ大生の北古間木に一城墟あり。中世渡邊氏の居城となす。

石下村 水海道町の北二里にあり。本石下以下の字に分る。鬼怒川の東岸にありて一邑を爲し、人口約四千あり。生糸及び繭の取引賣買盛に行はる。八幡神社、東弘寺などあり。八幡神社はもと領主豊田氏の城墟にして、今も所々に殘墨遺瀝の跡を存し、壘の高さ六尺に及ぶものあり。天正以後長く廢城に歸す。社の附近樹木に富みて幽邃の雅趣多し。東弘寺は即ち領主豊田氏の草創に係り、村の南邊にあり。石下より街道を北行すること約二里にして、結城郡の治所本宗道村に達すべく、其間道路平坦なり。

**豊田城址** **下石**の東南、**豊田村**字**本豊田**の中城と稱する地これなり。石下城主**豊田政幹**の族**豊田治親**の城地なりしといふ。面積約千七百五十坪許りの地域、中央に高く空渥これをめぐる。東北隅に**御城稻荷社**あり。即ち城地の守神に當るものと傳ふ。その西南二町許りに**釣鐘池**の小池あり。

**宗道村** **北海道町**の北方四里十町にあり。村制を布けども郡内四通の驛路に當るを以て、人家相聚り、**結城**一郡の郡衙を置く。村内**法光寺**に**旗懸松**あり。周圍一丈二尺高さ約七八尺、**枝葉**鬱茂して地面に垂れ頗る韻致あり。傳にいふ、昔**豊田四郎多賀谷**氏を常陸の下妻城に攻め、敗戦して退く途次この松に旗を懸けて人馬休息す。時に**多賀谷**氏の追撃急なり。即ち旗を棄て、遁走せりと。今も同時にその旗を**珍襲**せり。また、村内に**宗道明神**あり。東夷**阿部宗任**の首級を葬ると稱す。下栗城址は村の北部字下栗にあり。文明年間**常樂寺**氏の據るところといふ。

宗道村より常陸國下妻町へ至る北方僅かに半里、四方嶽島郡の諸川へ至る約五里二十町。而して郡内の大邑結

城町へは北方約五里を隔て、下妻町より常陸眞壁郡の西部を通じて達する一街道あり。今、便宜上結城町の記述を先にし、尋で結城町以南附近の名勝に及べんとす。

**結城町** **結城郡**の北隅に位し、下總國內第四位の都會なり。人口約一萬二千、常陸の水戸より下野の小山に通ずる鐵道はこの地を通じ、東方常陸の**川島停車場**へ二哩二十九鎖、西方小山停車場へ四哩十九鎖を隔つるに過ぎず。小山停車場へ出で以て東北鐵道に連絡すべし。町は停車場の北に展き、**街路**縦横に通じて往來繁く、**百般**の商業頗る隆盛にして**市況**繁榮なり。町内に**蠶業學校**、**農業學校**等の設備あり。**結城紬**は往昔よりその名天下に高く、明治に至りても著しくその需用を増し、ことに**紺緋**の如きは社會中流婦人の衣服として専ら囑望せらる。蓋し、その地質染色の牢實にして耐久の効力に富むと並びに**紺緋鮮明**にしてよく時好に適せるとによれりといふ。年々の**産出**高多額なるはいふまでもなし。町はまた頗る**社祠佛閣**に富みてことに**寺院**の如きは**弘經寺**以下二十餘宇を算するに至る。

●●●●●● 結城町大字大谷瀬及び下野國絹村大字築の間を跨る大城址なり。牙城の地は即ち結城町に隸す。天慶三年藤原秀郷平將門を誅滅するの功に因り鎮守府將軍に任せらる。乃ち本城を下野小山に築いて自らこれに居り、支城を茲に構へその族をして守らしむ。これこの城の創始なり。鎌倉朝府の時源頼朝小山朝光を茲に封じ、歴世之に居り、遂に結城を氏とす。慶長年間徳川氏結城秀康の封を越前福井城に徙すに及び一旦荒蕪に委せしが、後元祿年間に至り水野勝長を結城に封じ、故墟に築いてこれに居らしむ。これにより子孫相襲ひて明治戊辰の役に及び官軍の據る所となり、賊と互に勝敗あり、軍休んで竟に廢す。今は大抵田圃となり往々濠渠の形を存せり。結城七郎が春王安王を奉じてこの城に戦死のことは、載せて結城戰場物語に悉し。同書に曰く「そもこの結城の城と申すは、四方の總堀廣くふかければ、大船も泛ぶが如くなり。水の上の岸は二十四丈をびえたるに、亂れ打ちて逆茂木引き、小楯をあまたつき立てたれば、異國のはんくわい張良も面をむくべき様ぞなし。たとへば秦の始

皇帝咸陽宮の四面に鐵のついで地を四十丈につかせて敵をふせぎ給ふが、秋は必ずかりがねの南國へ渡るに飛行のさはりなればとて南北の築地に雁門と名づけて窓をあけさせ給ひしが、今この城の有様雁門なければ鳥だにも走りがたうぞ見えにける。」  
●●●●●● 華藏寺 結城町にあり。結城直光の草創にして、開山を宗巴和尚といふ。禪宗臨濟を奉せり。

●●●●●● 稱名寺 結城町にあり。新居山と號す。眞宗西派にして關東七箇寺の隨一なり。はじめ親鸞の高足眞佛房これを開基し、爾後六老僧の一人必ずこれに住職たりしといふ。本尊阿彌陀佛像は名工春日の作と稱し、彫刻の巧緻觀るべし。また太子堂には聖德太子自作の肖像を安じ、堂の額は仁和寺覺助法親王の眞筆なりと傳ふ。その他境内に結城朝光以下歴世の墓塔あり。町内弘經寺に亞げる名刹とす。なほ寺の附近玉日の堀間に親鸞上人の配玉日宮墓と傳ふるものあり。

●●●●●● 弘經寺 結城町にあり。淨土宗關東十八檀林の首位に列し、文祿四年、結城秀康の

創建、存把上人の開基たり。境内本堂、方丈、庫裏、鐘樓等四五の堂宇これに連り、その壯麗はや、勝名寺に劣るものあるも、而も閑雅にして禪味多きは當寺を以て勝れりと爲す。寺の南に永正寺あり。同じく結城町の一名刹に算せられ、寺内に結城政朝の墓あり。

源翁和尚墓 結城町安穩寺にあり。和尚は即ち那須野に妖狐を化度したる人、安穩寺の住僧祚蓮と交深く、この寺に留錫したりと傳ふ。諡を大寂院法王禪師といへり。

健田大神宮 結城町字小塙にあり。延喜式内に列し、武淳川別命を祀る。なほ同所に見龍山乘國寺あり。結城氏廣の草創にして禪宗曹洞派に屬す。

結城寺 結城町の正南、山川村大字新宿にありて、清淨蓮華山と號す。白鳳年間僧祚蓮の草創に係り、源賴朝、結城朝光等の崇信厚く、後深草天皇また金剛寶寺の勅額を賜ひしといふ。由緒多き古刹なり。

山川城址 同じく山川村新宿にあり。一に綾戸城址とも稱す。平將門の創築にしてその出城と稱せり。天慶三年將門の滅ぶるや、家臣阪田時幸竊かにその持佛不動を奉じてこの城に隠れ、以て朝軍を惱ませしと傳ふ。後結城朝光の子山川重光の居城となり慶長年間に至つて廢城す。城址二丸の跡は方三町ばかりにして今は概ね耕圃に化せり。正北に追手あり。高壘深濠所々に殘存し、雜樹深くその上を閉す。二丸の遺跡の南に牙城の跡あり。南北一町東西二町ばかり、殘壘到所に點在して老杉鬱蒼たり。和歌御前の祠はその東南に當り、字若御前と呼べる地の壠間にあり。將門の嬖妾和歌御前の墓所なりと傳ふ。

常陸國

常陸國は本地方に於て東北部を占め、東西十一里半、商北三十里、面積凡そ三百三十方里を有し、東は太平洋に面し、西及び南は下野下總に接し、北は磐城に接す。一市十一郡にして、水戸市、東茨城、西茨城、那珂、久慈、多賀、鹿島、行方、稻敷新治、筑波、眞壁即ち是なり。茨城縣これを管す。地勢は中央に八溝山脈南北に連亘して下野の國境を劃り、取上峠、花瓶山、尺丈山、鷲子山、白山(三四四米)等を爲し、那珂川の溪谷に切られて對岸に渡り、鷄頂山、佛頂山、吾國山(五一八米)難臺山(五三八米)筑波山(八七六米)加波山(七〇四米)等を聳立せしむ。此山脈の北方、磐城の國境に近く、久慈川里川の間を走れる山脈あり。矢祭山、男體山、武弓山、西金砂山等あり。この東に多賀山脈あり。この山脈は二派に分れ、東に片倉山、唐藤峯あり。西に飯倉山、續石山あり。國の中央部は霞ヶ浦及びそれに連れる平野を以て

成り、地質多くは沖積層に屬す。河川は久慈川、那珂河最も大にして、共に西より東に流れて海に歸す。其他櫻川、酒沼川等あり。鬼怒川は下野より來り、西部の平野を灌漑して利根川に合す。湖沼は霞浦最も大にして、周圍三十六里を有す。

沿革 今又此國の沿革を原ぬるに、古へ國府を茨城郡(今の新治郡石岡)に置く。

天長年間以て親王の任國となし、特に之を太守と稱せり。平治中平清盛奏請して佐竹忠義を州の介に任じ、州治を司らしむ。治承の末源頼朝兵を遣はして忠義を撃ち之を殺す。忠義の從子秀義陸奥に奔る。頼朝北伐の日秀義來歸し舊邑に復するを得たり。

爾後頼朝又小田知家に筑波郡を授け、小田城を守らしめしが、是れより佐竹小田の兩氏交々州の介となり、州事を知る。建武中興の後足利尊氏當國の守護に任せらる。既にして其反するや佐竹貞義尊氏に應じ、大椽高幹、小田治久等官軍に應ず。然れども後皆尊氏に降れり。應永の頃江戸通房大椽氏を襲ひて水戸城を抜き、兵勢頗る振ふ。

天正二年小田氏治上杉の舊臣太田資正と戦ひ、城陥つて自盡し乃ち滅べり。同十八年

江戸重通大榎淨幹を滅して全州を併せ、子義宣をして水戸城に居らしめ、以て相州の北條氏に抗せしが、北條氏の亡ぶるに及んで、欸を豊臣氏に通じ、當國を領する故の如し。關ヶ原の役義宣遙かに石田三成に應ず。役終つて徳川家康其封を削り、之を出羽の秋田に徙し、第六子信吉を水戸に封ず。信吉早世して第十一子頼宣を之に代らしめしが、其駿河に轉するに至りて、第十二子頼房を封じ、支封を府中(後石岡と改む)及び宍戸に置かしめ、別に又漸く土浦、笠間、牛久、下館、谷田部、下妻、麻生の七藩を設く。徳川氏の末年水戸の臣國を脱して密に江戸に入り、關老井伊氏を櫻田門に殺す。後國內黨分れ頗る紛擾を極めしも、維新の時に至つて全く鎮靜し、新に志筑、松川、松岡の三藩を増置す。尋いで皆改めて縣となし、又廢して新治茨城二縣となせしが、今は更に新治縣を除き獨り茨城縣を存せり。

**交通** 官設常磐線は下總より來り、牛久沼附近の低地より次第に高原に上り、牛久、荒川沖を経て、土浦町に達す。筑波山登山者は此處に下車すべし。又此町は霞ヶ浦に

瀕せるを以て、これより北浦航行之汽船絶えず發着す。これより汽車は筑波山下の平野を略南北に横ぎり、神立、高濱、石岡、羽鳥、岩間の五驛を経て友部驛に達し、小山友部間の汽車と連絡し、内原、赤塚を経て水戸驛に達す。これよりは國の北方中部に至る水戸太田間の線路を岐ち、愈北に向ひ、勝田、佐和、石神、大甕、下孫、助川、小布津、川尻、高萩、南中郷、磯原、關本を経て、磐城國勿來に入る。上野より六時間、急行四時間なり。小山友部間は水戸市と下野國とを連絡するものにして、其間に笠間胡桃下稻荷の流行神あり。烟草の主産地下野國茂木地方へ至るにも此線に由るべし。水戸、太田間は那珂川以北國の北部の交通を司るものにして、十二哩餘の長さを有す。其他水運には土浦を基點として霞ヶ浦を航行する舟路數線あり。土浦鹿島間、土浦佐原間、土浦銚子間、土浦江戸崎間等はなり。

**産業** 本地方屈指の米産地にして、稻敷、行方二郡の地はことに著名なり。されど品質は良好ならず。麥作また甚だ盛んなり。食用農産物は豆類を最とし、筑波、眞





ろと傳ふ。鹿島道の記にこの城の形勢を叙していふ、「四方に堀のかたありて築立たるやうなる山城なり。樹木枝を蔽ひ茂り合ひたる中に太神宮鹿島の神の社あり。上は平かにして中に谷を隔て、二の曲輪を構へしと見えたり。その曲輪の東に龍ヶ峯といへるところあり、爰に臨みて見渡し侍るに東は鹿島の海見えて眺望かぎりなく、南は四面はるかに續きたり云々。」

龍ヶ崎町附近地方は地質學上頗る興味多きところにして、往古—少くとも今を距ること九百餘年前の天慶年間までは、霞ヶ浦の水深くこの一帯の地を浸したるならんといふ。將門記に、將門の國香を攻めんとするや、埴生郡神崎に船を舩して直ちに信太郡江戸崎に至ると書せり。以て證とするに足る。即ち當時にありては鬼怒川は小貝川を合せて筑波郡北相馬郡の間を決流し、利根川本流もしくは印幡沼波ヶ浦これと連絡せし大海の中に注ぎしなり。かくて漸次年を経て、陸地は次第に隆起し、大小の沼湖は幾個となく自己の境域を劃し、以て今日の光景を呈するに至れり。されば洪水の時は龍ヶ崎柴崎等會て湖水となりし低卑なる地方は、常に非常なる水害を被り、到底その害に堪へざるを以て、遂に鬼怒川末流開墾の舉を促したるなり。牛久沼などはその往古の洪水の殘留せるものなり。

逢善寺 龍ヶ崎町の東方にして、江戸崎町の南に當り、太田村大字小野にあり。慈雲山と號し、天台を奉ず。寺城實に一萬八千七百餘坪、堂塔またこれに應へり。開基は不詳なれども清水濱臣の總常日記によれば慈眼大師の創建と唱へ、また一書には文武天皇の建立と傳へ、或は天長年間僧覺營これを開くといへり。域内に觀音の堂あり。

江戸崎町 稻敷郡の東南端に位し、人口約三千五百、稻敷郡役所の所在地なり。地は一隅に僻するを以て、陸路の交通は不便なりと雖も、霞ヶ浦に出づる水路の便あるを以て、船舶常にその埠頭に集る。江戸崎城址あり。俗に城山と稱し、佐竹氏、松平氏等の居城なりき。町より西方龍ヶ崎町へ六里十六町、新治郡土浦町へ六里二十町餘を隔つ。

不動院 江戸崎町の西北にあり。天台宗の巨刹にして、文明二年土岐治英の創建に係り、僧天海を以て中興の祖となす。境内一萬六千六百六十餘坪、本堂を始め幾多の堂

塔巍々として森樹鬱鬱の間に峙立し、頗る壯觀を極む。附近に大念寺及び管天寺あり。  
高田熊野社 江戸崎町の東高田村にあり。祭神は紀州の熊野神社と同體にして、朱雀天皇の御宇承平年間の創建に係る。古へは社殿輪奐の美を盡くし、社域また頗る廣潤なりしと雖も、中世の戦亂に遭遇して痛く廢頽し、慶長七年徳川氏神領三百石に寄附するに及んでや、舊時の觀を恢復したりといふ。これより逢善寺までは南方凡そ二十町を隋て、その途中椎塚は名高き貝塚なり。

椎塚介墟 これ、關東各地方貝塚の中に於て、特に學術の研究に資して著名なるものなり。地を高田村大字椎塚の中峯と呼ぶ。一椎の岡阜の兩側に貝殻を推積して、その厚さ平均三尺乃至四尺に及ぶといふ。

大杉神社 江戸崎町の東、阿波村大字阿波にありて、同町より高田を経て達す。その縁起の大略に曰く、神體は神護景雲年間釋勝道上人が彫刻するところの降魔の靈神不動尊なり。爾後、桓武天皇の御宇傳教大師の法弟快賢阿闍梨奥州の逆賊誅滅の爲め

大師が手刻する所の四魔降伏の不動像を請ひて此地に來り、靈夢を感じて大杉明神と同じく鎮座したりと。古へは別當を龍華山安穩寺と號し、毘首羯摩天作彌勒菩薩の像を社側の一室に安せしが、維新の後全く分離して大杉神社と稱せり。而して古來之を大杉明神と稱するは、社殿の左傍に亭々たる老杉の空を凌ぐものあるに依れりといふ。社の西北少許に神宮寺あり。古へ北畠親房の據守せるところなりと聞く。

榎縫神社 江戸崎町を北に距る二里十四町にして、木原村大字木原にあり。式内の社祠に屬し、現今縣社に列せらる。古來信太郡（今稻敷郡に改む）の一の宮と稱し、經津主神を祭神となす。社記の傳ふるところに據れば、上古經津主神及び武甕槌神の豐葦原の中國に降臨し數多の惡神を爰除せし時、功成つて暫らくこの地に留り後竹來の里（即ち阿彌神社の地）に轉徙して再び登天し給へり。さればこの地は神代より靈地なりと雖も、創めて社殿を建立せしは、推古天皇の御宇十五年にありしと。城内に松杉多く、中別に神代杉の巨株あり。毎年五月十五日を以て官祭を行ひ、夏期の私祭

また頗る盛なり。

阿彌神社 楯縫神社の西北二里餘、阿見村にあり。同じく式内の神祠にして今縣社の一に列す。古來楯縫神社に次いで、舊信太郡の二の宮と稱せり。祭神一座を武甕槌神となし、相殿二座を経津主神及び天兒屋命となす。創建は蓋し和銅の頃なるべしといへり。社域は楯縫神社とは同じく、中に正殿、拜殿、幣殿、幣殿、大杉殿、神樂殿等鱗次して整列し、頗る輪奐の美あり。且つ地境霞ヶ浦に臨みて眺眺甚だ愛すべく、こゝに近傍嶋の夕越の峯はその風景最も賞翫するに堪へたり。例年九月五日を以て官祭を執行し、秋期私祭を舉行す。他に一月の開扉祭、四月の花鎮祭、五月の田植祭などあり。

江戸崎より新治郡の土浦町に通ずる街路は略々霞ヶ浦の西岸に沿ひて北行す。楯縫神社及び阿彌神社は即ちその途上に鎮せる社祠にして、阿彌神社より土浦町までは西北凡そ二里を隔つるに過ぎず。今土浦町方面は暫く措きて、再び常磐沿線の地方に戻り以てその紹介を續け行かん。

若柴金龍寺 常磐線佐貫停車場の東方約十町、馴柴村大字若柴にあり。龍ヶ崎町を

距ること西北方約一里二十町とす。曹洞の名刹に推され、應永年間新田義貞の菩提の爲めに天真自性禪師の開基せるところといふ。はじめ上州新田郡金山にありしを、豊臣秀吉命じて牛久に遷らしめ、次いで寛文年間今の地に轉徙せしものといふ。寺域一萬餘坪、境内に本堂、開山堂、庫裏、方丈、道了堂等あり。本堂には弘法大師作の如意輪觀音像を安置し、その胎内に義貞身代りの薬干觀音なるものを藏すといふ。また、寺域に新田氏累世の墓あり。蓋し、寺と共に上州より轉徙し來りたるものにして、義貞の墓またその中に存し、別にその四百五十年忌に當り同家より建立したる石碑あり。寺寶中に唐の李龍眼筆十六羅漢の圖あり。稀世の逸品と稱し、初め承陽大師入宋の際理宗皇帝よりこれを承け、後北條氏の寶庫中にありしを、新田義貞鎌倉勲定の際これを所有し、遂に轉じてこの寺の珍寶となりしものといふ。寺境、高所にあり、牛久沼に臨み、或は田圃樹林に圍まれて頗る幽邃なり。且つ庭に櫻梅等の花多し。

牛久村 佐貫の次驛にして、北相馬郡の藤代驛より若柴を経て來れる陸羽濱街道はこの地を通じて北行す。地の西に牛久沼あり。停車場の南二十町にして、沼に沿へる地を字城中と稱し、古へ城塞の趾なり。

牛久沼 佐貫停車場よりすれば約八町を隔つ。沼の周圍大凡五里餘、北に向つて又形を爲し、南に於て小貝川に通ず。湖畔四時の眺めに飽かず。蓴菜を以て特産となす。

女化原 牛久の東に横はる高原性の平野にして、東西、南北各三里を有す。原頭に女化稻荷あり。佐貫停車場より約一里を隔つ。里傳に曰く、往昔この地の農忠七なるもの一老狐を救へり。老狐その恩に感じて美人に化し、忠七に嫁して一女二男を擧げ、その季子三歳の時一首の和歌を留めて去り、行く所を知らず。里人依りて根本ヶ原を改めて女化原と稱せりと。

牛久の次驛は荒川沖と稱する停車場にして、女化原の中に位し、附近に見るに足るべきものなし。かくて汽車の線路は濱街道の並木松と相並びて、その荒涼たる高原の間を走る。高原盡くる所低地顯はれ、前に筑波の双

峰を望み眼下に浩蕩たる霞ヶ浦と、瓦葺數百家なる土浦町を見る。

土浦町 常陸國の中央にありて、新治郡に屬し、霞ヶ浦の西岸に位す。國中第二の都會にして人口一萬一千六百餘を算し、濱街道上、東京以北の繁華なる都邑なり。もと、土屋氏の封邑に屬し、明治の初年には新治縣廳を置かれし地なり。土浦、真鍋の二區に分つ。鐵道線路は町の東南を掠め、霞ヶ浦に接してその停車場あり。霞ヶ浦を航行する汽船の發着所は字川口町にありて、銚子、鹿島方面に毎日數回の往復あり。街衢整正、商業隆盛宏屋大厦多し。最も繁華の地は中城町、本町なり。この地は元來低濕の位置にあるを以て、一朝霞ヶ浦漲溢せば、全市悉く水を被むるの恐れあり。近年周圍に隄壁を建設するの議あり。風俗は水戸市の質朴に反し、寧ろ華奢を競ふの俗あり。町に區裁判所、郡役所、監獄支署、中學校、高等女學校等あり。字明神と稱する地に平國香墓と稱するものあり。俗に五總明神と唱ふ。されど國香墓と稱するものは國內に數ヶ所ありて、その孰れか眞なるを知らず。たゞこの明神にては毎年九月二

十三日を以て大祭を執行すること、既に九百年の久しきに及べりといふ。町の西南三里十二町にして谷田部町あり。それよりなほ西南行して下總國の守谷町に至るべく、谷田部町には細川興元の古城址あり。

**土浦城址** 土浦町の中央にありて、現今郡役所及び裁判所を此處に設く。地位霞ヶ浦に枕み、丘陵その南北を擁す。傳へて平將門の所築となし、後永享中若泉氏これに據り、爾後幾多の變革を累ねて豊臣氏に歸し、結城秀康の所領となり、更に徳川氏に及びては藤井、西尾、松木、土尾、大河内の諸氏交々代りて封を此に受け、最後に土屋氏再びこれに居り以て明治の廢城に及べり。

**西子岡公園** 土浦停車場附近にありて櫻花多し。園内に月讀神社あり。昔土屋氏此所に亭を造りて翠松亭と名じき。八景の和歌あり。霞ヶ浦の歸帆「ふく風もなきし霞ヶ浦近く連れて港へ歸る友船。」田面の落雁「いくゆふべ田の面とほく雁が音の落ちくる聲に秋はさびしき。」小松の秋月「吹きはれて月ぞ澄みゆく岡の上に雲のあとなき松

の嵐に。」照井の晚鐘「夕つくひこゝに照井の影くれて聞くも淋しき古寺の鐘。」錢龜の夕照「夕日影うつらぬまゝに旅人のあらはに渡る里の板橋。」田村の夜雨「それかとも里一むらの夜の雨にはほの見え初し燈火の影。」高津の清嵐「市人の聲も高津の里近みけさは賑はふ晴るゝあしたに。」筑波の暮雪「くれかゝる空とも見えす筑波根のは山しけ山雪にうもれて。」

**眞鍋町** 土浦町の地方に連続したる一都邑にして、人口約二千八百を有し、土浦町の所轄とす。眞鍋公園あり。高丘に位し、霞ヶ浦の風光を一眸に收むべく、眺望佳なり。地に善應寺、八坂神社等の名勝あり。善應寺の傍にある井を弘法井といふ。古へ弘法大師巡錫の途次これを穿つとなせども、遽に信すべからず。眞鍋町より陸羽濱街道は直ちに北方石岡町を指す。而して眞鍋より分岐する縣道は一方小田、北條を経て眞壁町に向ひ、東方は田伏に至りて霞ヶ浦を渡り、その西岸に沿ひて終に潮來町に達す。

筑波山は土浦より真鍋を経て登臨すべく、土浦よりの里程約五里三十町ありて、人車を通ず。また日本鐵道奥羽線小山より岐る、水戸線によれば、下館停車場より下車して約五里を有す。今、その途上の名勝を紹介せん。

●藤澤村 真鍋町より西北一里三十町にして達す。藤澤城址、神宮寺、藤原藤房遺髪塔あり。古へ藤房卿の居館村内にありしと傳ふ。

●法雲寺 藤澤の隣村斗利出村大字高岡にあり。土浦より凡そ二里を隔つ。寺は文和三年大光禪師の開基にして、後光嚴天皇の足利尊氏及び小田治久に勅して造營せしめし所なりといふ。寺境、岨々なる斷崖の上に占め、背後には筑波の山脉蜿々これに迫るあり。前面には一帯の櫻川逶迤として林樹村落の間を奔るあり。四時の風光甚だ愛賞すべし。その他境内に龜井の泉及び雷鳴石あり。

●小田城址 土浦の西北三里、小田村大字小田の南部字本城と稱する地にあり。廣さ方五町許り、今なほ塹壕壘壁の跡を窺知すべし。城は文治年間八田知家の築く所にし

て、爾後世々これに居る。元弘の初め藤原藤房の當國に配せらるゝに當り、知家六世孫高知これを監守す。後足利尊氏の亂を作すや高知の子治久足利氏に屬して北畠顯家を陸奥に攻め、軍敗れて走る。次いで北畠親房等義良親王を奉じて陸奥に入らんとし、途に暴風に遇ひて諸將の船離散し、親房の船常陸國に漂着す。治久乃ち附近の諸城主とこれを關城に迎へ官軍に應ず。親房城にあること五年、日夜賊兵と戦ふ中、治久賊兵の猖獗なるを視て終にまた賊に降る。爾後歴世足利氏に屬せしが、その末世に至りて北條氏に歸し、上杉氏の故臣太田氏に攻められて城陷る。於茲、太田氏小田原に代つて當城の主たりしが、慶長年間に至りて終に廢城に歸す。近世有志の士相謀りて城址に一碑を建てたり。

●北條町 小田村の西北にあたり、土浦より西方四里を隔つ。筑波郡の一小商業地にして、人口約三千五百を有す。地に小田氏の分城址、泉觀世音菩薩等あり。觀世音の名はこの地方に高く、歸信するもの多し。真鍋町より來りし縣道はこれより筑波の西

麓をめぐり、椎尾を経て眞壁郡の眞壁町に達す。

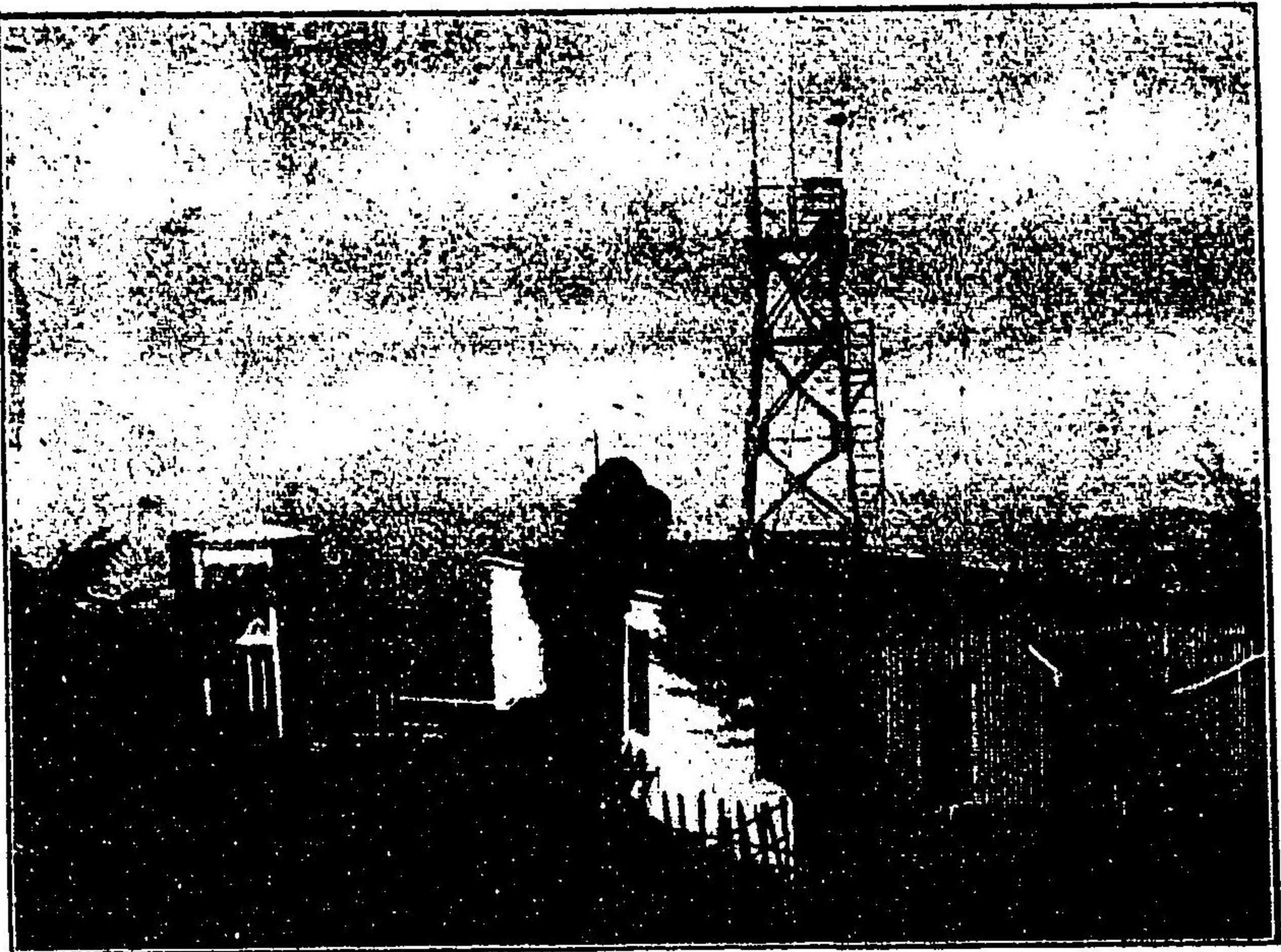
●●●●● 普門寺 北條町の北方十數町田井村大字神郡にあり。眞言に屬し、この地方に於ける名刹となす。田井村より筑波町までは北方僅かに十數町を隔つるに過ぎず。土浦よりこの地の字臼井まで俵を通せり。

●●●●● 蠶影神社 神郡の東方山中にあり。養蠶家の守護神にして、欽明帝の御製にも「常陸なるたてとたてのに織る布は筑波の山の錦なりけり」などあり。

●●●●● 筑波町 筑波山の中腹にあり。北條町より一里を隔て、坂に據りて市街を成す。夏期は登山の客多きを以て頗る繁榮し、町に妓樓旅宿多く、俗氣紛々たり。

●●●●● 筑波神社 筑波町の上端にあり。昔は知足院の佛院ありしが今これを廢す。俗にこれを筑波の本宮と稱し、筑波山上の神祠を奥の院となせり。更にその上方に大御堂中禪寺あり。筑波神社と共に建築丹亞を施して最も壯麗を極む。

●●●●● 筑波山 關東平野の東北に屹立する峻秀の靈山にして、男體及び女體の兩峰より成



(るれ成に營經の下殿宮階山故)所測觀上山體男波筑

る。女體や、高く標高八百七十八米突を有せり。往古よりその形貌を以て世に喧傳せられ、これを詠せるの詩歌頗る多し。山頂最も眺望に富み、常總の平野を一眸の中に收め、兩毛の高山峻峰はこれを雲霧の間に望むべし。その他利根、鬼怒の諸川は帯の如くなるを見るべし。葦穂、加波の諸山は脈を脚下に起して蒼龍の蟠れるにも似たるを覺ゆ。山中各種の名蹟に乏しからず、男體の社には伊弉諾尊を祀り、女體の祠には伊弉册

尊を祀る。また女體の山嶺に山階宮殿下の御經營に成りし觀測所の設備あり。東の山峽に白瀧の勝あり。水清く、老樹茂りて頗る幽邃の致をなし、旅館その間に介在して夏季避暑の客最も多し。丹比真人國人が「鳥が啼く東の國に、高山はさはにあれども、册神の貴き山の、並立の見かはし山と、神代より人の言ひつぎ、國見するつくばの山を、冬木茂時じく時と、見すていなばまして戀しみ、雪消する山道すらを、なづみぞあが來し。筑羽根をよそめに見つゝあり兼て雪消の道をなづみきけるかも。」加茂真淵「筑波山しづくのつら、今日とけて枯生のすゝき春風ぞ吹く。」

日本山嶽誌曰く「筑波山は筑波、眞壁、新治の三郡に跨る。筑波町より一里三十二町餘、眞壁郡紫尾村大字椎尾より一里十八町にしてその山頂に達す。日本風景論云、この山甚だ高からずと雖も、關東沖積平原の中心より突出するを以て、これを望む甚だ顯著なり。中腹以上までは悉く花崗石より成り、且つ此山より地方もまた花崗岩直ちに下野の境上に延縁すと雖も、絶頂のみは閃綠岩に屬す。東京市より水戸に山間の下館停車場に下車し、此所より登山するに二途あり。一は人力車を驅り南に東行し、壘垣質の平地を馳する六里、山の南腹筑波町に

出で、登るもの。二は下館より東南行し町屋(海拔五三米突)に出で、此所より北折し伊佐々村を經、山の北麓羽取村より登るもの。二は間道なるを以て、一の道途を取る可、即ち筑波町にて筑波神社に詣で、直ちに登り始む。山麓より中腹以上に到るまで、悉く花崗岩より構造せられ、南方東方太平洋よりの風は、水蒸氣を拉し來り、直ちに此山に衝擊するを以て、松、杉、櫟、特に山の南側は翠色滴れんとす。町より西峰即ち男體山の絶頂まで五十町、頂は閃綠岩より成る。伊井諸尊を祀り、神社數座あり。頂よりは關東平原の全體、富士、淺間、日光の連山を望み眼界壯宏、精神躍らんとす。男體山より東峰即ち女體山に到る七町餘、處々に鐵鎖を繋ぎて登山者の便に供す。女體山頂も亦た閃綠岩より構造せられ、伊井册尊を祀り、眺望の壯宏なる、男體山に譲らず。此所より筑波町に下る凡二里、四時半にして上下し得、筑波神社の傍より東に下る凡一里、白瀧明神社あり。其傍に白瀧あり、飛瀑甚だ壯觀(此山足白井より凡二十五町にして至り得、夫れより登ること凡二十町辨慶七辰に達す、別に筑波町に通ずる小徑あり、即ち石岡街道を横ぎり、凡十三四町の行程なり、土人は十八町と云ふ)筑波山中は溪水花崗岩を浸蝕し、奇怪萬狀、而して此等の溪水は、大概南流して霞浦に注ぐ。日本名勝地誌六、或は云ふ、筑波齋と築波に作る。上古東海逆流し、國中總べて海底に在り、然れども此山高きに因り、能く海波を防ぐこと堤防の如く、山西の諸國、幸に魚鼈の住とならざるを得たり、因て以て名くと。又云ふ、古へ天照大神此山に登りて筑を彈じ水波曲を奏するに至りて、鹿島の海潮逆流し、波濤山頂に及ぶ、故に



筑波山と號すと。又云ふ、往昔、崇神天皇（一に、綏靖と云ふ）黄金の山を爲さんとし、人力効を奏し難きに因て、之を上下の神祇に禱る。時に漢土五臺山の一峰劈開して我國に至り、分れて二山となる。一は大和の吉野山にして、一は此山即ち是れなりと。荒唐怪誕、一も信するに足るべきなしと雖も、是等幾多の奇説を附會し、以て其威靈を添へんとする者、豈に此山の自ら秀靈なるが爲ならざらんや。筑波町。山の半腹に在り、人家軒を並べて市街を成し、旅舎商店皆備はらざるなく、繁華山間の僻村に似ず。街端に筑波神社の一の華表あり、其左傍に石碑を建て、碑面に嵐雪の俳句を刻す。市街を過ぎて漸く上方に至れば、中禪寺の佛閣あり。院を知足院と云ひ、大御堂・三層塔・鐘樓・太子堂・求聞持堂其他三四の堂塔相隣次す。是れ即ち往時筑波神社の神宮寺たりし者にして、桓武天皇の御宇、法相宗の高僧徳溢大士の開基に係り、同時に筑波神社を勧請したりと云ふ。而して是れより女體山に登るには、大御堂の前面を右に進み、宇東山町の傍に其鳥居あり、男體山に登るには、左りして三層塔の前を過ぎ、正面に其鳥居あり。二路孰れを先にするも固より不可なれども、通常先づ女體山の路を取り、女體山より鐵籠に縋りて御幸ヶ原に下り、直ちに男體山に上る者多しとす。殊に又尋いで椎尾山の薬師に詣らんと欲するもの、如きは、再び筑波町に下らず、男體山より直に之に赴くを得べきを以て、其順路を取るに至便とせり。（男體山より筑波町に下るの間奇景なし、水無川・小町櫻共に觀るに足らず、椎尾に下り、尙進して葦穂・加波・雨引の諸山を跋渉す可し）御幸原。（標高凡二千四百九十尺）男體・女體二峰

の間在り。（女體山より鶴鶴が原に下り、夫れより御幸が原に至る、山中小祠無數）仰いで東西を望めば、二峰彌々高く、峻奇峻絶、眺視極めて壯偉なり。其間五戸の茶店あり、亭名皆雅、一を依雲と云ひ、一を迎客と云ひ、一を遊仙と云ひ、一を向月と云ひ、一を放眼と云ふ。毎店の家人は朝に登り夕に降る者にして、餅及び田樂等を賣ぎ、参拜者の休憩に便にす。大黒石。女體山の東に在り。自然形の奇石にして、渾身肥大、左肩に囊を負ひ、右手に槌を揮うて、安座する大黒天に似たり。因つて以て其石を名く。又相距る甚だ遠からずして、出船・入船石なる者あり、亦自然の怪石にして、長さ十間大さ三間許、形状巨艦の港灣を出入するもの、如く頗る奇なり。胎内潛。是れ亦女體山の東に在り。長さ十有餘間の岩窟にして、人匍匐するに非ざれば、之を過ぐるを得ず。常山上參詣する者常に以て造化の一奇戯なりとし其至妙に感ぜずんばあらずと云へり。高天原女體山の東に在る一高處に聳立すること凡そ九丈ばかり、峻峻なる峰角を鑿ちて之に達す。頂上風景甚だ佳、極目窮處なく八州の野盡く指點すべし、蓋し諸神の集會所に擬し其名を命ぜし者ならん乎。石門亦女體山の東方に在り。峭岩屹突、上に大石を蓋ひ、兩岩の間大約二尺有餘、以て通路とす。蓋石は堅二十間横九間餘にして、三邊空に懸り、磊々將に墜落せんとする者の如し。故に其下を過ぐる者、概ね鬼胎を抱き、慄然栗の膚に生ずるを覺ゆ。俗に此石門の地を稱して鬼神返し又辨慶七戻りと名くるは、之れが爲めなり。水無川古歌に因つて其名著はる。男體山の絶頂より稍や下りたる所に流出す。常陸風土記に、謂之雄神、其側流泉、冬夏不絶、とあ

る即ち是れなり。下流他の小溪を會し、迂蔡屈曲して西北に流下し、筑波町犬字國松に至り、筑波川に會流す蓋し此川亦山中處々に一奇景を添ふる者なり。(此山茶店皆茶を用ひず、素湯を用ふ。其故を問へば、みな川の名水を汚さるるなりと答ふ。)

再び土浦町に歸り、更に常磐線に乗じて進めば神立、高濱の兩停車場あり。その中、高濱町は石岡町の東南一里に當り、霞ヶ浦の要津をなして、石岡町の門戸とも稱すべく汽船日夜に發着せり。

石岡町 高濱の次驛あり。町は新治郡の北方に位し、懸瀨川の北方にあり。舊常陸國府の所在地にして、舊名府中と稱し、徳川氏の世には水戸の支藩として松平氏の居城たりし地なり。石岡の名は明治にいたりて命名せしもの、古來濱街道の要衝たりしが、近世に至りて、益々繁盛に赴けり。今土浦町に亞ぐの都邑となり、人口約一萬三千を算す。市街は商家稠密して商業最も盛なり。就中、醤油及び清酒の醸造に名あり。筑波山を望んで街頭の風光佳し。道路は濱街道を幹線として二條の縣道を南北に分派

す。即ち北行するものは西茨城郡の笠間町に通じ、南方のものは高濱町に止り、以て霞ヶ浦の汽船に通ず。

石岡城址 石岡町の西方にあり。古へ大椽氏の居城にして、天正年間その族滅びて佐竹氏の臣南氏これに繼ぎ、更に徳川氏に及びて六郷、皆川、松平の諸氏を経て、元祿年間松平頼隆の領封に歸し、子孫相尋ぎて以て維新の廢城に至れり。

總社神社 石岡町の西端にあり。草創知れず。中世より鹿島神社の攝社なりしといふ。

國分寺及國分尼寺址 國分寺は石岡町の北端にあり。聖武帝朝の國分寺の名殘にして、天正年間兵火に焼かれて炎上後再修せしものと傳ふ。國分尼寺址はその西北十餘町にあり。地を尼寺ヶ原と呼ぶ。田圃の間、千年前の礎石墨々として散見す。訪ふものをして坐ろに昔を偲ばしむ。

平福寺 石岡停車場より十町を隔て、貝地と字する地にあり。大椽氏の墳墓を存し

別に平國香の墓と稱するもの亦その中に立てり。

●戀瀨川 ●また信筑川といふ。水源を加波、難臺兩山の間に發し、行々近傍の諸溪水を集めて東南に流れ、閑居、龍神兩山の間を過ぎ、また石岡町の傍を経て高濱町に至り以て霞ヶ浦に注ぐ。延長大約七里。古來これを詠するの和歌極めて多し。新拾遺集の式乾門院が歌に「水の上の泡と消えなば戀瀨川ながれてものは思はざらまし。」及び壬二集の家隆が歌「戀瀨川つれなき中に行く水は年もせかれぬ涙なりけり。」はこの河に就きての詠なり。

●閑居山 ●石岡町の西一里、志筑村大字上志筑にあり。筑波山脉の一支峰にして、老松山を蔽ひ、古櫻その間に枝を交へて、花時の風光絶美なり。古來和歌の名所としてその名高く、梅、花、春雨、郭公、五月雨、鹿、雪、田井、杜を景品として詠歌頗る多し。夫木集卷二十、後九條院の御製に曰く「梅がえの花の垂氷も岩そぐしづくの山に消ゆる白雪」また同集に光俊の歌あり、「春雨のしづくの山にちる花は木の下で

との突とぞ見る」なほ同村字中志筑に志筑古城趾及び志筑の森あり。

●柿岡町 ●石岡町の西北二里十數町にあり。人口約三千餘を有す。地形一盆地を成し、西に筑波山、西北に足尾、加波の兩山を控ゆ。柿岡塞趾あり。

●如來寺 ●柿岡町大字柿岡にあり。もと親鸞上人の霞ヶ浦なる浮島に開創せしをこの地に重興せしもの、今も眞宗に屬し、宗祖上人二十四輩の隨一乘然坊の遺趾を傳ふ。

再び石岡驛に戻りて常磐一線の恒をかれば、羽島、岩間、友部、内原、赤塚の五驛を経て水戸市に達すべし。その中、岩間村は山間の小邑にして、多く薪炭を産す。難臺山に登るべし。

●愛宕神社 ●岩間停車場の西方二十三町にあり。山を愛宕山と稱し、地方に於ける流行神なり。

●難臺山 ●一に男體山又は羽梨山と呼べり。西茨城、新治の二郡に跨る。岩間停車場より西方一里十町にして山嶺に達すべし。標高五百四十米突峯尖銳くして矚目指點し易し。南北朝の際、小田五郎勝綱の義兵を擧げて官軍に應せしはこの地なりといふ。

今に猶城壘の跡を存せり。満山岩石多く、草樹極めて少なし。山麓に瀧前不動あり。避暑の好適地となす。

友部驛 常磐線、小山線の分岐點として大停車場を置く。日本鐵道の重要な一驛なり。新に原野を拓きたるの地なれば、素より街衢等の見るべきものなけれども、將來は頗る有望なり。これより水戸驛へ十哩を隔て、その間に内原、赤塚の二小驛あり。

濱街道は石岡より常磐線に岐れて東北を指し、堅倉、小幡など稱する地を経て水戸市に達す。その間上野合村大字小幡の権現坂と稱する地に千貫樓の名木あり。これ水戸光國卿の西山に隱栖せし頃愛賞措かざりしものにて、今のは後世の栽植なれどなほ見葉がたき風趣あり。ことに近世齊昭公のその近傍街道の左右に櫻樹を移植するあり。花候に至れば遠近の客雲集して甚だ雑沓を極むと聞く。

水戸市 今、人口約三萬六千、茨城縣下第一の都會にして、同縣廳のあるところ、舊御三家の一たる徳川家の城邑たりし地なり。北に那珂川を控へ、南は千波沼に蒞む。全市はこれを大別して上市、下市の二に分つ。上市は高燥の地にして西に延び、下市

は低濕の地にして東南に開く。上市には官衙、學校、銀行、會社の類多く集り、下市には民家櫛比し百貨輻輳す。物産には有名なる雲井煙草、鱈鹽辛、寒水石細工物、梅干等あり。交通の便を擧ぐれば、日本鐵道會社線は上市柵町に停車場を有し、それより延長して海岸に沿ひ、陸前岩沼に至る。海岸線即ちこれなり。又同所より太田町に至る間十二哩の水戸鐵道あり。市の北方を流るゝ那珂川には、湊及び祝町まで一日九回汽船の往復あり。而して水戸の發着所は、停車場に近き杉山河岸にあり。今、水戸市内外の名勝と細説するに先ち、この地より近傍府縣廳所在地及び管内著名の地に至る里程表を掲げん。

東京府	二十九里十八町	江戸崎町	十七里十八町	大宮町	六里廿六町
千葉町	三十二里〇八町	龍ヶ崎町	十七里廿八町	鹿島町	十三里三十一町
宇都宮市	十九里〇五町	磯濱町	三里〇三町	土浦町	十二里十三町
福島市	四十九里〇五町	笠間町	五里二十三町	潮來町	十五里〇四町
前橋市	四十一里二十町	那珂湊町	四里廿四町	鉢山町	八里〇三町

常陸國

下館町	十三里廿二町	谷田部町	十五里〇九町	結城町(下總)	十七里十二町
眞壁町	十二里廿二町	麻生町	十三里〇九町	古河町(下總)	二十五里〇一町

●●●●●  
**水戸城趾** 上市、下市兩市の間にありて、千波沼及び那珂川はその前後に通せり。昔は常陸大掾の城地にして、次いで江戸氏、佐竹氏の居る所となり、慶長年間家康の第六子信吉封せられしも夭折し、第十一子頼宣代り、次いでその駿河に移るや、その弟頼房代り、以て光國以下數世に及び。城を本丸及び二之丸の二に分つ。本丸は東方の一郭にして、徳川氏以前佐竹氏の代々居城せし地、俗にこれを佐竹城と稱す。今水戸中學校を此所に置けり。二之丸は西方の一郭にして、舊徳川氏殿宇の存在せし所、今尚ほ一二の樓臺を殘して纔に當年の餘光を止む。茨城縣師範學校此に立てり。木造建築なれども、規模宏大にして配置宜しきに適し、近縣有數の校舎なりと稱せらる。舊城大手門の前面一帯の地はこれを南北三之丸と稱し、また自ら一郭を形成す。規模甚だ大なり。

●●●●●  
**弘道館趾** は即ち三之丸にあり。館は天保年間藩主徳川齊照が大に天下の形勢に鑑みて、文武兩道を藩士に講習せしむるの目的を以て創始せるものなり。維新以後は西方の一部を割きて縣廳及び縣會議事堂の敷地に充てられ、また南方舊馬場の地には水戸市高等小學校を建てられたるを以て、今は僅に東北の一隅を存するのみ。その面積一萬七千六百餘坪あり。これを、

●●●●●  
**第二公園** となす。舊弘道館正廳及び正門は大手門に對して立ち、鹿島神社及び孔子廟はその後方にあり。蓋し、齊昭が鹿島神社を祀りしは武勇を尙ぶ所以にして、孔子廟を起せしよりは文教に資する深意なりといふ。その中間に八角堂あり、弘道館記碑を藏す。碑は高さ一丈五尺、廣さ六尺三寸の寒水石より成り、碑文は齊昭の自ら撰し自ら執筆せし所のものに係り、所謂水戸學なるもの、大本を示す。園内に梅樹數千株あり。花候に至れば清香馥郁人の袂を襲ひ、遊客遠きより簇集す。所謂水戸の梅と稱するものは常盤公園とこの内とを云ふなり。園は常盤公園の景致なしと雖も、また

自ら一種の雅趣あり。水戸に遊ぶもの、必ず訪ふべきところとす。

●**上市** 以下上市の概観を記せん。柵町は水戸城二之丸下仙波沼に瀕する地にして、もと藩の重臣の邸宅を列ねたるのところ、維新前は最も寂寥なる所なりしが、鐵道敷設以來常盤、水戸、太田の三線皆な此所に集り、大停車場を設置せられたるを以て、地は殆んど水戸市の中心なるが如き觀を呈し、旅館、茶亭等の大厦高樓軒を列ねて建設せられ、今全く上市、下市を連絡するに至り、市内の最も殷賑なる街衢に推さる。停車場の建築も頗る壯大にして、東京以北にありては仙臺に亞ぐの建築なり。水戸市役所また茲にあり。柵町より銀杏町を上り一直線に西に通ずるものは、即ち南町泉町大工町にして、水戸市主要の街道なり。重なる商店、旅館及びいばらき、茨城日報の二新聞社の如き皆なこの街衢に建らる。金町、馬口勞町は泉町の西北にありて、泉町に併行せる街路なり。商業繁盛なれど主として近村の農民を顧客とせるを以て、一般に田舎風あり。これより西、谷中には二十三夜尊の堂あり。近郷の農民の信仰最も

厚く、賽日の雜沓頗る繁し。

●**常磐公園** 上市の西南にあり。一に第一公園ともいひ、日本三公園の一たり。大工町より元山町を経てこれに通ずべく、停車場より約二十町餘を隔つ。天保十年烈公が遊息所としてこれを拓きたるもの、衆庶と樂を偕にするの意を以て偕樂園と名づく。域内二萬九千九百餘坪。之に植ゆるに一萬餘株の梅樹を以てす。これを以て花時は清香馥郁、頗る人骨を仙ならしむ。ことに園の南甍、老松翠を啣みて參差たるの邊は、俯して千波湖の碧波を臨むべく、仰で筑波、葦穂の翠巒を窺ふべく、園中風光の最なる所と稱す。仙奕台の目あり。甍下に仙湖暮雪の碑あり。水戸領内八景の一に推さる。好文亭は園の西端にあり。亦烈公の經營にして建築最も瀟洒古雅を極む。樂壽樓上の眺望頗る佳なり。亭をめぐりて躑躅、萩、芙蓉あり。四季共に紅白妍を競ふ。園に對して櫻山綠岡あり。昔義公が高枕亭を設けて明儒朱舜水を延き、世俗の外に嘯きたるの地、傍に、竊窰阪、曲直港あり、今千波村大字見川に屬す。また一仙境なり。

●●●●●  
水戸の梅 通常世に謂ふ水戸の梅とは即ち上の常磐公園と第二公園の梅とを指す。毎年その季に至れば、日本鐵道會社は東京より廻遊臨時汽車を發して、以て雅客の清遊を促す。都人士一度は必ず行きてその地を訪はざるべからず。

原伍軒の記文に曰く「歲之二月、風和氣暢、襄裝徐步、遊借樂之芳園、園之地勢雄而風色美、梅花方盛、紅白爭開、瓊瑰簇而成堆、幽香吐而滿園、此則我公之所嘗裁焉、豈徒追履嶺之清趣、蓋又曹公解渴之遺意、乃道遙園中、眺瞻亭上、瑤階憑高、倚檻臨湖、此則我公之所嘗登焉、崇高雖不過望氣、廻瀾又方堪騁目、三山壁立、林樹繁茂、仙湖繞其下、清淪映日、萬頃一碧、燒聲浮泛於下、鶴聲翔於上、綠岡突然出千湖右、老松無數鬱葱植菴、此則園之所對焉、蔚然而蒼、屹然而秀、其巖岬峻峭、出于岡上者為筑波嶽、青尾加波諸峯、翠巖如黛、逶迤而北至荒山、崔嵬岩巖、岩能摩穹者、皆常野之望、而歷々在指掌之間、凡園之勝景、于晴雨干花月、莫一不佳、而西至毛野、東接滄海、豁然而開、翕然而合、凡目所極、悉具於園之觀者矣、若夫澹瀟籠林、新紅燒山、柳垂而帶煙、草嫩而鋪翠、綠萍動而浮鷗眠、衆芳酣而遊禽朝者、則陽春之所造也、嗚呼府城雖不乏勝地、其佳境豈有過于此者乎。」

●●●●●  
常磐神社 園の東隣に鎮して、その入口にあたる。義烈兩公を祀るところにして、

社格は別格官幣なり。社殿清麗崇高、まことに名君の神靈を綏んするに足るべし。社殿の側に神樂殿あり、烈公追鳥狩用として作りたる陣太鼓を藏む。徑五尺長さ六尺二寸、震天動起雲發風の鼓銘を刻す。烈公自筆なり。世に之れを震天動地の太鼓と稱す。また堂外に同じく烈公鑄る所の白砲あり。寺院の梵鐘を毀ちて作りたるもにして、當年水戸藩の意氣の如何に壯なるを察するに足るべし。社の境内を出つる數十歩にして、舊彰考館書庫あり。維新後舊水戸城内より移せしものにして義公以來の書籍を藏す、大日本史の編纂もこれにより成り、水戸學の基礎もこれにより立ちたりとせば、蓋し、我が邦の教學史上輕々に觀過すべからざるものなるべし。また神社の後方數百歩の地には茨城縣農學校あり。近世の設立に係る。

●●●●●  
水戸東照宮 上市に於ける神社にては常磐神社の他に、なほ宮下の東照宮、元山町の別雷皇太神、下金町の八幡宮等あり。中に就いて、東照宮は舊藩政の日に於ては最も重せられたるものなれども、近世は庶民の崇信昔日の如くならず、壯麗なる社殿も

や、損所に生ずるが如き様なり。別雷皇太神は頗る俗間の信仰厚きものにして、賽客も甚だ多し。八幡宮は水戸市の總鎮守にして、今縣社に列す。その他寺院は烈公の廢佛に由りて、多くは毀損し去られたるを以て、現今殆ど見るに足るべきものなし。

藤田東湖墓 上市宇常磐村の共同墓地にあり。碑石は斑石を以て造る、烈公題して「表誠之碑」といふ。また傍に藤田幽谷及び元治元年國難の爲めに殉死せし水戸人士の墓あり。中央に昭武公自筆の殉難之碑を建つ。なほ同じ村の瀧阪に曝井の舊址あり。道の東側の小池にして、清泉の沸々たるは、萬葉集の「三粟の中に向きたる曝井の絶えず通はむそこに妻もか」及び八雲抄衣笠内大臣の「今ぞ知る思ひ出でつ、曝井の更にも人は戀しかりけり」とある泉なり。

以上の他、なほ上市には常總新聞社あり。銀行には茨城農工銀行を始めとして水戸百四銀行、川崎銀行、水戸支店、常陸銀行などあり。病院には四町に共立茨城濟生病院あり。上金町には水戸測候所あり。劇場には大工町に常磐座、鳥見町に水府座あり。

●●● 下市 更に下市の大體を記せん。下市、一に下町といふ。上市の東にあたり、維新前に於ては水戸の本街たりしが、維新後は繁昌自から上市に移りてや、衰微の色あり。商業地にして、市中の最も繁華なる地を本町通りと稱す。商家櫛比して百貨輻湊するを見るべし。銀行の下市にあるものに水戸六十二銀行、群和銀行、代耕銀行、下市銀行等あり。製造工場にては水戸煙草株式會社、本廣煙草製造場等あり。蓋し、煙草は水戸産物の主要なるものなればその製造販賣もまた頗る盛なり。劇場は竹隈町に水戸歌舞伎座あり。而して社寺には市の西北に寶鏡院あり。南方に吉田神社あり。

これより水戸市を中心としてその附近の名勝を案内せんに、水戸市より南方二里長岡に至る街路に二つあり。下市より通ずるものは即ち陸羽濱街道にして、上市より通ずるものは近世の開通にかゝる。まづ上市及び下市以南の地より洞沼沿岸の地を紹介して、漸次東海岸の磯濱町及び大洗海水浴附近に及べんとす。而して水戸市の南方二里許り、大戸村に老櫻あり。關東屈指の巨木と稱せられ、樹幹十尋に余り、枝葉數十坪に及ぶ。花時の美觀想ふべし。且つその木の地を離る、數尺の所に蟠屈せる瘤を生じ、自ら千手觀音の形姿を成す頗る奇なり。



千波沼 水戸上市の南に接し、下市の西にあたる。周囲約一里二十六町、櫻川、逆



常磐公園より千波沼を望む

き居民の飲料に供す。浴徳泉の名は文化年間に徳川齊修の命名せしところなり。

川の二川これに注瀉し、四時の眺め佳なり。水戸光國卿曾て八景を撰む。曰く七面山秋月、神崎寺晚鐘、梅戸夕照、不谷歸帆、柳堤夜雨、藤柄晴嵐、封田落雁、緑岡暮雪これなり。菅茶山の詩に曰ふ、「笙聲數所市西東、百歲弦歌見舊風、晚出城門尋勝概、仙波湖上雨空濛。」

浴徳泉 千波湖南千波村大字笠原にあり。地

一岡阜を成して、笠原山といふ。松杉鬱蒼として山頂に水神の祠を鎮す。清泉は即ちその磴下より涌出し、寛文年間寛して水を水戸市内に引

●●●●● 圓通寺 千波村の東にあり。曹洞宗にして、文明年間水戸より今の地に移せるものなり。境地を拂澤といふ、北は千波沼を隔て、東照宮の森、停車場等を望み、西北は常磐公園を觀、東北に水戸の城樓屹然樹梢の上に聳ゆるを仰望するなど、風景頗る快

●●●●● 吉田神社 水戸下市の南端吉田の森にあり。地を吉田臺町と呼び、下市の所管にして、千波村の東に當れり。社は縣社に列し、日本武尊を祀る。式内の社祠にして、安康、武烈兩帝の朝頃に創立せられたるものなるべしといふ。社域高燥の丘陵を占め、千波沼の東岸に臨んで、城内老木多く景致頗る掬すべし。南に樂王院あり。また村の東隣酒門村に常樂寺あり。義公建立の臨濟寺にして、境内下市全街を一眸の中に收むるの眺望あり。茨城縣立農事試験場は同じく酒門村内にありて、下市を距ること約一里許りなり。

●●●●● 稻荷村 水戸下市の東南にあたる。村に佛刹二三あり。字六反田にあるを六藏寺と

稱し、酒門村に近し。その東字栗崎にあるを佛性寺と稱し、眞言に屬す。また字大串に稻荷社あり。東隣下大野村大字鹽崎に長福寺あり。就れも名ある精舎とす。

酒沼 鹿嶋、東茨城の郡界に横はり、周圍七里を有す。酒沼川これに注ぎ、その水再び酒沼川となりて出流し、淡町に至りて那珂川に合し、恰も袋の兩端に紐を結びたるが如き形狀を成す。一ツ松はその北岸石崎村大字上石崎にあり。曾て水戸光國卿の愛賞せし老松にして、枝幹蟠屈、翠色恰も滴らんとするが如し。

磯濱町 太平洋海岸に沿ふ一都會にして、南方袖が浦に面し、東茨城郡の東方に位す。人口約一萬二千、盛なる漁業地なり。水戸より東に三里三町を隔て、那珂川に汽船の便あり。

祝町 磯濱町の管内にして、町の北那珂川の北岸にあり。妓樓、酒舖相櫛比して繁華なる趣を呈す。

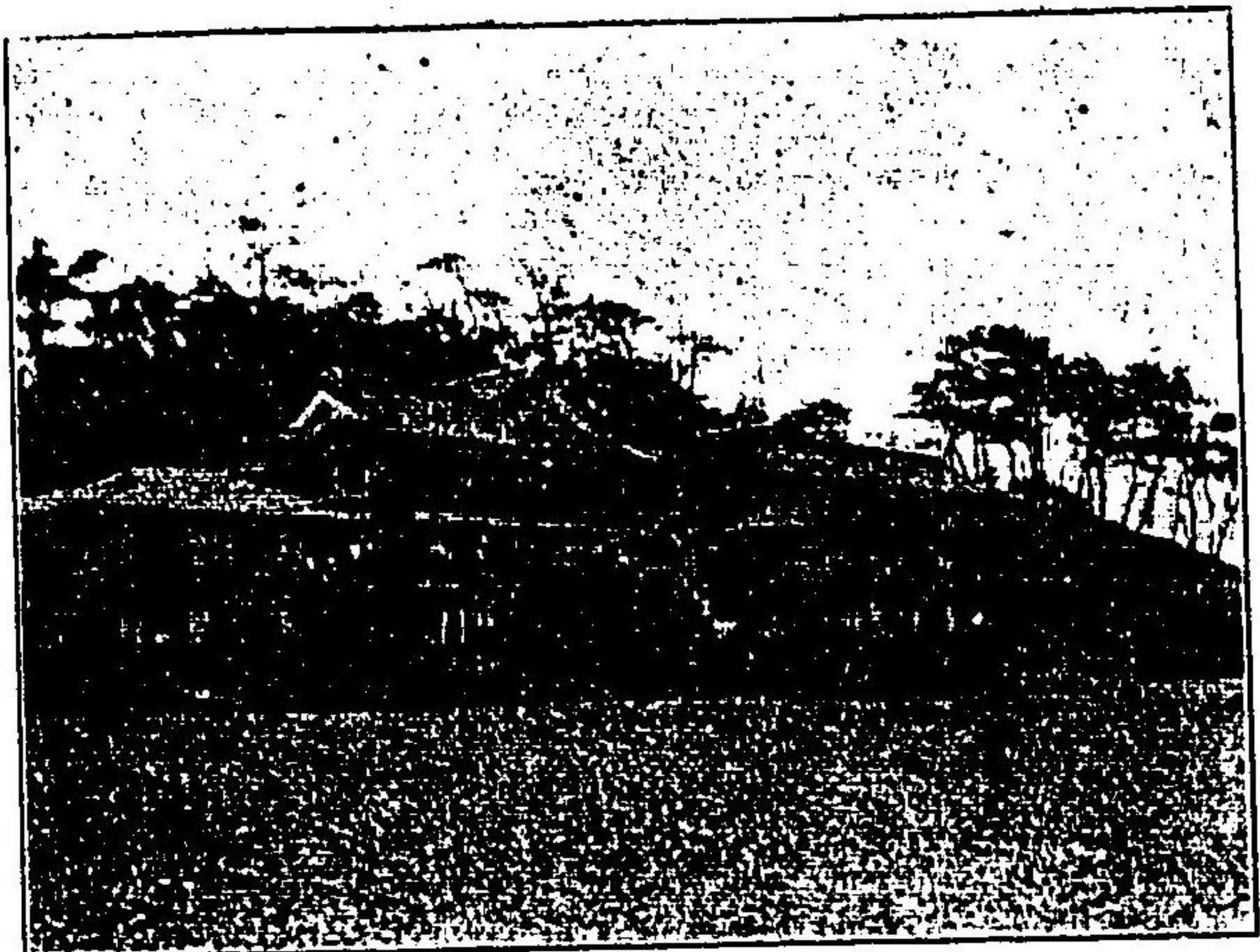
願入寺 祝町の附近にあり。眞言の名刹にして、延寶年間水戸公の命により久慈郡

久米村よりての地に移して再修すといふ。また天如神社あり、水戸公の創始に係る。

大洗海水浴 偕樂園と並んで常陸國名勝の最たり。磯濱町の東北に近く、同町の所管とす。

海岸岩石多くして、後に低き丘陵を負ひ、大平洋の怒濤浩蕩として天を浸し、風景壯大なり。されど下總の銚子に比してその風景の變化に富まざるとを遺憾とす。海に臨みて大旅館三四あり、

四季共に客多し。附近の名勝として鬼洗の澤、琴引の瀧、烏帽子岩、磯濱八景などあり。就れも雅客の愛賞して止まざるところ、また大洗磯崎神社あり。地に多く鮑を産し、また魚肉の新鮮



大洗

を誇る。水戸市よりの里程は約三里二十五町にして人力車の便あり。また那珂川を祝



**港公園** もと御殿山といふ。港町の西方にあり。高丘にして、東方外洋を望み、南方那珂川を隔て、祝町願入寺の蒼翠に對し、最も風光の美に富む。近傍に館山あり。元治甲子の亂武田耕雲齋の占據して幕兵に抗戦せし所なりといふ。また港町の北方高臺に水門歸帆の勝地あり。水戸八景の「一」に屬し、港公園と相並んで附近の一勝地に推さる。

**浄光寺** 港町の西北にあり。衆寶山と號す。真宗に屬し、同宗二十四輩の第二十一なり。開基僧を唯佛房と稱し、もと水戸市常磐村にありしを轉徙せるなり。境地高阜に居り、眺望尤も勝れたり。地を即ち館山と稱す。

**平磯海水浴** 平磯町は港町の北一里にあり。常陸第一の漁業地と稱し、人口七千を算す。海水浴場あり。潮水極めて清澄にして、波濤また激烈ならざるより夏期浴客甚だ多し。然れどもその客は概ね兩毛もしくは下總北方の人によくして、東京よりするものは甚だ少しいふ。

**平磯觀瀾所** 平磯町の北數町にある高原の勝地なり。觀瀾所の名は水戸烈公の命名せる所なりと聞く。眺望快論 巨浪砂を噛み、激波天に躍るの状最も壯快なり。

**磯前酒列神社** 平磯町北十三町余磯前の岬にあり。齊衡三年丙子の創建にして大己貴神及び少彥名神を祀り、今國中幣社の「一」に班す。その地遠く海中に斗出して大洗岬と相對し、海上の眺望甚だ佳なるのみならず老樹蒼鬱として社殿を圍繞し、幽邃にして且つ爽快なり。

大洗の地より南北に海岸を縫へる道路あり。南すれば、鹿島灘にしてこれより鹿島祠に至るまで十七八里あり沿道の村は皆漁家蟹戸、地は到る處砂山にして見るべき名蹟なし。されど大洋の風景は流石に捨て難き處ありとぞ。また大洗より海岸を北に傳へば磯前祠より前濱村松、久慈を経て助川に至り、磐城街道に合す。この海岸の里程約七八里なり。海岸概じて平滑なる沙濱にしてその神怡も弓弦を張りたる如くなれど見るに足るべき風景少し。只河原子、鮎川の海水浴場あり。

更に、水戸市より北を指せば、濱街道は左し、磐城中街道は中央を北に向ひ、右は下

野國黒羽に至る路蜿蜒として半ば田畝、半ば丘陵の間を行く。常磐線の鐵路は概して濱街道に添ひて走る。佐和、石神を經れば久慈川あり。

●●●● 上宮寺 石神の西二十八町にあたり、神崎村大字本米崎にあり。檜原山正法院と號し、承久三年親鸞上人の徒弟明法房證信の開基せしところなり。本堂には慈覺大師阿彌陀如來及び親鸞上人自作の像等を安じ、西圓寺、高德寺、清流寺等の末院その傍に連れり。

●●●● 村松大神宮 石神驛に下車して行くべし。村松村大字村松宿通りに鎮し、社地の小字を宮山と稱す。天照皇太神以下を奉祀し、元祿年間伊勢より奉遷せしものといふ。源義公及び烈公の尊信厚く、今の社殿は烈公の時改築したるものなりといへり。海濱の砂山にして、社背より北方を望めば眞弓の山脉蜿蜒翠を弄して雙眸の中に攢り、西方には砂子山の奇勝近く目睫の間にあり。砂子山は即ち烈公が撰びし水戸領内八景の一に屬し、地に一碑を建て烈公自ら村松晴嵐と題せり。また大神宮の南に眞崎浦あり。

北に阿漕沼あり。眞崎浦は一に村松沼と稱し、周圍凡そ一里九町、風光明媚にして愛すべし。宗祇家集にこれを詠するの和歌あり。曰く、「さびしさはいと眞崎の海の波かへる昔のあとのあはれさ。」

●●●● 久慈川 は磐城國八溝山にその源を發し、阿武隈山脈の一部多賀山脈と八溝鷲の子山脈との間にある狭長なる第三紀層地を南流し、長さ二十八軒にして常陸に入り、太子に至りて花立山の諸溪流を合せ、漸次那珂の平野に出づ。磐城、常陸との國境に矢祭山の勝あり。

往昔の濱街道は久慈川を渡りて大和田に至り、石那坂を登れば、鹿島灘の怒濤遠く松樹の間に顯はれて、風景の妙旨ふべからざるものあり。大甕の停車場とこの街道との距離五六町なり。この沿岸、秋季松魚の漁多し。大甕の次驛を下孫驛となす。

●●●● 大甕神社 大甕驛より下車すべし。社は怪岩相重れる數丈の上に鎮坐し、鐵鎖によりて頂上に登れば、前は一面の鹿島灘烟波萬里水天に接し、水木の磯、久慈の濱、磯

ヶ濱の長汀曲浦弓形をなし、後に富岳筑波を遠望すべし。また泉が森あり（停車場より六町）。泉川の水源辨天祠傍に湧出して、銀波巴渦をなす。

河原子及鮎川海水浴 共に下孫停車場より十五町以内であり。平磯より助川に至る間の海水浴場とす。また、諏訪の梅林、諏訪の水穴、大久保の風穴等皆な下孫停車場より行くべし。

真弓山 下孫停車場の西南一里余にして達すべし。濱街道の右手に連れる一小丘陵にして、阿武隈山脈の一部多賀山脈の末端にあり。真弓祠と寒水石とを産するを以て名高し。新篇常陸國志に曰く、「古昔八幡太郎義家奥州陣の時、此山に參籠し、祈願の事あり。仍て其所を陣が峰といふ。義家此峰にて、六月朔日を元日とし、越年の祝あり。其時山内に雪降り、義家の坐せられし所石となり、今に降懸石と云ふ。山嶮にして岩石をつたひ、権現の社頭に出るに、五尺七寸ほどの寒水石、いくつと云ふこともなくあり。絶頂は皆岩石なり。其岩の上に社頭、本社拜殿崇嚴なり。破風の紋、或

は釘隠等に五本骨の開扇に、日の丸を出したる紋あり。佐竹の造營なり。本山派年行事徳善院守護せり。杉の大木二本あり、一本をちい杉といひ本社の後にあり。岩窟の所なれば、至ること不叶。一本はばあ杉といふ、華表と樓門の間にあり。目通りにて二丈餘まはる。山深くして天清れたるときさへ、中央より上はほのくらく森々たり。まして陰るときは、山の上は霧くらくしてみえがたし。」

助川海水浴 下孫の次驛を助川驛といふ。海岸を距ること約十四町。海岸に會瀬と稱する漁村あり。助川と共に高鈴村に屬す。地の後に聳ゆる高鈴山は、標高五百九十八米を有し、多賀山脈の一主峯にして翠嵐多し。この地の氣候冬季に於て大磯沼津など、大差なしと言ふを以て一時この海岸海水浴の大磯とまで稱せられたれど今は稍々衰退せり。蓋しこの海岸風景に於ては多く東海道相模海岸に譲らざれども地形自から南北の差ありて、何となく暗きやうなる心地するが爲めなるべし。地に水車の瀧、八幡清水あり。八幡清水の所在地を土佐と稱し、清泉湧出して清澄玉の如し。傳ふこ

れ八幡太郎義家東征の時箭鏃を以て穿ちたるの跡なりと。宗祇法師、ゆく末のいざ白浪のいさ、川會瀬の浦も人はかけせず、

大雄院 日立村大字宮田の西北部にありて、山を杉室山と稱す。山中眺望極めて好く墨客の屢々吟詠を曳く所なり。地に十勝及び二十四景の名あり。その中殊に秀絶なるは大白峯、觀海亭、獅子岩、猿戒壇、鵝巢、犬作、天狗窟等にして、その他の奇勝一々枚擧するに遑あらず。

助川より小木津に至れば、汽車の路は街道と交互し、前者は却つて山に近く後者は全く海岸に出づ。

川尻 一漁村なれど附近の地を集めて豊浦町と呼ぶ。人口約三千五百、舊來漁業の盛なるを以て名あり。ことに鯉鹽幸はこの地の特産にして多く他地方に輸出せらる。地、頗る風景に富み、北には一帯の嶮崖の松を載せて遠く海中に出づるを見るべく、南には常陸の海岸の長く弓弦を張れるが如きを望むべし。近年海水浴場を開設す。停車場より町まで二十二三町あり。

川尻近傍の名勝 川尻に八景の目あり。即ち御番山月、川尻二見、筈磯漁火、蠶宮

避暑、見崎不動、水内歸帆、松崎仙境、蠶養千潮これなり。蠶養神社は、孝靈天皇御宇の草創にして、養蠶の祖として知られたる稚産靈命を祀る。その附近に神縁甚だ多し。蠶養濱の如きその一なり。また同境内に海氣浴の絶壁あり。停車場より西二町に友部櫛形の城址あり。妙徳山法鷲院は日本三大師の一と稱す。牛浦に近き碁石濱よりは碁石を生し、牛浦の南方赤見臺へは停車場より二十五町餘にして達す。

高萩 安良川、鳥名、秋山等と併せて松原町といふ。人口約三千三百、多賀郡役所の所在地にして、停車場を高萩に置く。夏季海水浴に適して浴客多し。

八幡神社 松原町大字安良川の東邊海岸の高所に鎮す。花山天皇御宇寛和元年山城國男山より勸請せし所にして、譽田別尊、大日雲尊及び氣長足比賣尊を祀り、往時は松岡藩主中山氏の崇敬淺からざりしといふ。地方の名祠なり。社城の東方よりは海洋を觀望し、眺め頗る爽快なり。

●松岡近傍の名勝● 松岡村は高萩の西北に接す。舊名手綱といへり。今その近傍の名勝を一括して説述せんに、手綱濱は大字赤濱の海岸をいひ、古へより勝地を以て著はる。即ち萬葉集にも「遠妻四高爾有世婆不知十方手綱濱能尋來名益」など咏めり。今に海濱の風光極めて明媚にして、人をして顧盼倦むを知らしむ。松岡城址は下手綱にあり。龍子山と稱し、維新前までは中山氏の居城なりき。森明神は上手綱にあり。朝香社と稱す。更に八景の目あり。即ち石崎夜雨、杉木山秋月、能仁寺晚鐘、高戸歸帆、關根橋晴嵐、龍子山夕照、永田落雁、湯沙暮雪これなり。

●磯原遠見所● 磯原は高萩の次々驛にして、北中郷村の管内に屬す。磯原遠見所、天妃山等の勝あり。遠見所は停車場に近し。地位高燥にして東南外洋に對し眼下に一島を俯瞰す。首を回らせば峯巒重疊波濤の怒るが如く、天然の風景眞個に一幅の畫圖を展ぶるに似たり。水戸黃門嘗てその領内を巡遊するの途次此に至つて數首の詩を賦す。今その一を抄録すれば曰く「逆旅登高會。開懷萬里風。大津翻浪白。薄葉歷霜紅。獨



秀一枝菊。孤飛片影鴻。三杯桑蔭酒。興入醉鄉濃。』なほ磯原の西方にあたり、北中郷村大字大塚なり西方山嶺に至る一里許りの所眺最も佳なり。俗にこの坂を十里上坂といふ。東南に海を望み、群巒を左右に顧みて矚目尤も勝れたり。

●天妃山● 磯原停車場の北數町にして大北川の河口に位す。岷々たる岩石海中に屹立して、寄せる碎くる狂浪高く飛散し、翠松海風に吟じて神韻あり。上に天妃の廟を安ず。天妃山の名實に



是に據つて起るか。また常陸風土記に所謂折藻山はこの山を稱するの名にして、古へはその名を以て呼べり。また、この島より十五町を隔てし海岸の海上二町許りに二ツ島あり。一島は波浪に破壊し去られて今は一を存するのみ。

大津町 磯原の次驛關本停車場より十二三町を隔つ。漁業繁盛の地にして、殊に多く鯉節及び乾鮑等を製出す。近年はまた海水浴場を設けて夏季の浴客を迎ふ。人口凡そ三千九百余、町に水産學校の設けあり。また同じ町字五浦に、波濤岩に激して奇聲をなすと傳ふる鐘鼓洞の奇勝あり。宇佐波山に佐波々地砥神社あり、山を一名唐歸山といひ、山上は老杉林をなして、航海舟夫の目標となるといふ。境内の眺望また佳なり。神岡は大津町の西に接す。

大日本地誌卷一に曰く、「常陸國に於ては、文政九年刊行黒崎某の常陸紀行に、常陸國は上古海水逆流して常なかりしが、後來漸次潮退き、人民常に陸地を得て居に安んじける故に常陸國といふ」と言ひけん如く、地形陷降隆起の最も著しき證據を残したるに似たり、則ち霞ヶ浦附近の一面海なりしもの、俄かに隆起して、高所は

山嶽、低所は田野、更に低き所は湖沼と化し、また、多賀郡附近の往昔海に瀕せし街道の今は海岸と距ること數町餘に及びたる、皆土地昇降の結果に因らざるべからず。現に風土紀に、國寄河原宿福黒磨時大海之邊石壁彫造觀世音菩薩像今存矣因號佛濱と記されたるその觀音の像の、今神岡村の南隅陸前濱街道より二町の西にありて、平扁なる岩石にその影像を見る、以て證とすべし。また源義家の東征したる道路も佛濱より西に距ること數町、當時海岸にありし勿來關址も現時の官道を距ること七八町の丘阜にあり。而して官道西側の岩屋五六丈の所には、波濤の浸蝕せし跡、歴々として辯すべし。今、これを歴史上年月より想定し、九百年間地變力は終始一様の隆起を爲せりと断すれば、現今佛濱の位置の海面上十八尺なるより推して百年間二尺、十年間二寸、一年間二分の隆起を爲せることを知るべし。また現今濱街道磯原の海岸に幾ゆる天妃山の如きも、義家東征の頃には葦爾たる一島嶼なりしと言へば、その東方海上に點在せる二つの島の如きも、數百年ならずして、蜿蜒たる一牛島を成すやも知るべからず。

平潟町 多賀郡の北隅に位して、常陸、磐城兩國の國境に接す。關本驛に汽車を捨すれば十數町にして達すべし。古來有名の港灣にして、鷹取鼻初島山鼻の二岬によりて圍まれたる小港なれど、港の内外多く、僅かに小船を容るゝに足るのみ。されど昔

時は江戸と奥州とを往復する船舶必ずこの港に寄港するを例とせしが爲め、紅樓相連り、漁唱蟹歌頗る地方的特色を有したりしが、今大に衰頽せり。明治元年幕府瓦解の時、上野輪王寺宮が海路奥州にのがれさせ給ひし時、御上陸あらせられたるもまたこの港なり。町の人口約二千四百、海水浴場の設けあり。近傍また勝地に富み、佳景地少なからず。芭蕉「このあたり眼に見ゆるものみな涼し。」

平瀧の名勝 平瀧町字黒浦山は鷹岡の稱ある地にして、満山、椎、銀杏の老樹森々たり。此所に八幡神社を鎮座す。また、停車場より八町岩花冷泉あり。同十八町に關山鑛泉あり。同一里の山間に湯網温泉あり。その他磐城に至る道黒浦には數多の洞門あり。

平瀧の市街を離れて、徒崖の一部を通じたる隧道を越ゆれば、地は既に福島縣磐城國なり。かの源義家が櫻花を咲じたる勿來關址はこゝより十二町を隔てたるに過ぎず。この附近は通常常磐線中にて最も風光明媚なる所と言はる。(磐城國の部に於て細説すべし。)

要之、水戸以北、殊に多賀山脈の東に横れる海岸は、第三紀層の山脈の餘脈往々にして海中に突出したるを以て、小徒崖小岩壁多く、風景を明媚ならしむるに於て殊に力あり。且、砂濱近畿地方のごとき白砂を見る能はざれども松樹の亂立せる風情は却つて東海海岸に勝るものあり。唯、沿岸の漁村多くは常磐鐵道開設と共に漸く近く開けるものなるを以て、その設備の甚だ不完全なるを憾とするのみ。

花園山 多賀郡の北方に位し華川村大字花園より十五町にしてその山頂に達す。花園神社あり。平城天皇の御宇坂上田村麿の草創と傳ふれども、新篇常陸國志にては佐竹氏の城墟ならんと疑へり。平瀧町及び大津町より各西方五里許りにして至るべし。境地峯谷深くして老樹枝を交へ、これを幽邃と言はんよりは寧ろ寂閑と評すべき方當れりといふ。社殿數宇及び八字の攝末社あり。また社下に朱塗の神橋を架す。橋下即ち大北川の溪流なり。一帶の風景や、下野の日光山に似て更にその規模を小にしたるが如きものと聞く。

○霞ヶ浦及び鹿島地方 霞ヶ浦は所謂水國を成し、行方半島其東に横り、利根川其南に流れ、遊覽すべき地亦尠なからず。鹿島、潮來等の名勝あり。下總地方よりするものは佐原より汽船便に由るべく、常磐線よりするものは、土浦及び高濱よりすべし。

霞ヶ浦 常陸國南部の大湖たり。東西七里十丁、南北六里三十六町、周圍三十四里十七町、北部は兩岐に分れ、一は高濱に至りて懸瀨川の河口に當り、一は土浦に盡きて筑波川のそぐ所たり。沿岸にある街道の都邑を擧れば、石岡町より來りて湖の東岸を繞れる街道には、玉造町、麻生町、牛堀の三邑あり。潮來町は牛堀より更に東方北浦の巨浸に通ずる北利根の岸にあり。而して鹿島は、此より一葦帶水を隔つるに過ぎず。湖の西岸をめぐるものは土浦より江戸崎に至り、小野川の河口古渡を経て、利根川の佐原河岸に至る。

玉造町 人口二千五百の小都邑にして、土浦の正西に當り、同町より田伏を経て來れる街道は霞ヶ浦の一端を渡りてこの町に達し、更に湖の東岸を繞りて麻生、潮來に至る。地に夜刀神社あり。また西南高須新田に高須の松あり。高さ二丈餘の老木にして、且つ地震ヶ浦に枕み、西方柏崎と相望みて風光奇絶なり。なほ、町の南方玉川村出沼に西蓮寺あり。玉造町に霞ヶ浦巡回汽船發着所を置く。

銚田町 玉造の東北三里半にして、北浦の北端にあり。人口約二千五百、鹿島郡役所の所在地なり。地は北浦、霞ヶ浦航行汽船の最終着津に當るを以て、最も貨物の集合あり。且つ市街もこれが爲めに繁榮せり。この地より磯濱町まで北方五里六町を隔つ西北二里巴村の字鳥栖に眞宗二十四輩の第三たる無量壽寺あり。また、その北に當り、同村太字太和田に式内主石神社あり。銚田町より北浦を汽船にて鹿島に渡るは甚だ便なり。

北浦 鹿島、行方兩郡に跨る細長なる湖にして、南北六里を有す。巴川これに注ぎ、而してその水は霞ヶ浦と共に利根川に注ぎ、遂に海に朝す。舟楫の便盛なり。

麻生町 霞ヶ浦の東岸に臨める一都邑にして、銚田町より五里を隔つ。人口約四千、

舊新莊氏の城地にして、今行方郡役所の所在地なり。土浦より汽船の便あり。その間六里、その他高濱及び佐原等へも汽船を以て通ず。町の東南大字富田に香澄山あり。一小丘にして高さ凡そ三十尺、丘上霞稻荷と呼べる小祠あり。宗祇法師の千所千句にこの山を詠じて曰く「とゞまらぬ春の浪逆の海もうし霞の山のするうすき空。」麻生の産物にはたん貝及び鰻あり。

徳富蘆花氏、「麻生の天王崎といふ所なり。小祠より少し離れて、唯一株飛龍の水に俯す如くさし出でたる大松の下に立てば、霞ヶ浦筑波山は眼中にあり。余は多く湖を見たれ共、此所の如く氣もはれなくと心ゆくばかりの景色を見たることなと思ふ。三井寺より琵琶を望みたるにもまして好しと思ふ。眼は先づ五七里の秋水を走りて、當面に筑波山を見るなり。遊きには之を枯野の果に見、冬木立の楢に見き、今や何の遮るものもなく、上に空あり、下に水あるの間に男體女體二つ並びて悠然と立つ温雅の山を見るなり。遊きには唯筑波の双峯のみ見き。今や筑波は東に波の如く起伏する連山を控へ、同じ形して更に小き加波山を従へ居るなり。其盡くる所は霞ヶ浦の兩角の其右なる高濱の入江なるべし。西は山勢直ちに夷して水に下れるなり。其水に下る處は相見崎にて、ほのかに白きは相見崎觀音の石段なり。其れより中絶えて更に西に近く頭を擡げたるは馬掛の鼻

にて、此時と此鼻の間は即ち霞ヶ浦の左の角なる土浦の入り江なり。見よ點々たる白帆の相追ふて入江を出で来るを。馬掛より更に西南なるは浮島なり。時は恰も小春の節、湖天長閑に暗れ、湖光鏡の如し筑波の双峰、宛ながら今水を出でし仙男仙女の如く、まばゆ氣に朝日に向ひて、面を薄紅に染めつゝ、悠々として香澄の水に鑑す。余は未だ此山の如く温然玉の如きものを見ず。土人の話に、霞ヶ浦の風景は天王崎と相見崎が双絶なりと。眞に然るを覺ふ。唯悠々くは此日暗れたるも空少の薄霞して、富士と野州の遠山を見ざりしを。」

●浮島 今稻敷郡に屬す。霞ヶ浦の一島にして、地形西北より東南に延き周回三里二十四町余といふ。金島と名けて浮島村と呼ぶ。人口二千三百を有せり。人家は多く島の西南部にあり。むかしは不祥ありと唱へて絶えて島外との婚儀をなさざりしといふ。村に山茶花多く、また蜜柑樹あり。大根を以て名物となし、霞ヶ浦幾灣の村も町もこの島の大根の供給を受けざるはなしといふ。島の脊髓として一脈の丘山あり。松樹多し。紀貫之の歌に曰く「さくら川瀬々の白浪しげければ霞うながす信太の浮島。」西南岸須賀津、阿波崎よりは六町を隔て、麻生町より一里、潮來より三里餘を隔つ。いづ

れよりするも船あり。

牛堀 麻生町の東南一里にして、同じく霞ヶ浦の東岸に沿ひ、汽船の發着所あり。此所より下總の佐原へ二里、鹿島へ三里、下總の銚子へ十里を隔つ。泊舟多く、船頭共の汽船の船より顔差出す風情可笑し。北利根川の長渠は即ちこの地より起る。

北利根川 牛堀より起りて東南に延くこと二里、末流は浪逆浦に至る。廣さ六十間と稱し、南岸に十六島（下總國）北岸に牛堀、上戸、潮來などあり。即ち河心は常、總兩國の境界を成す。川に舟楫の便多し。藤森天山「總陸横分地、烟波一道間、微風宜醉境、疎雨亦詩材、已盡酒三斗、更思鱸四腮、推蓬問前路、歌吹是潮來。」

潮來町 牛堀の東南一里にあり。人口五千五百、同じく北利根川の北岸に位して背後に稻荷山の岡阜あり。古來名高き要津にして、「潮來出島の真菰の中で菖蒲咲くとはしほらしや」の唄は昔ねく人にも膾炙す。水國の秋日ふ「されば風の染むる所、毬を弄する女兒も婀娜媚を呈し、所謂、水國女郎能搖槳、櫂を揺かす女も赤き襟して白粉を

傳くるを見るなり。菅茶山の詩に云ふ、「村妓凝粧漾短棹、問人何處船船饒、竹枝一曲東都様、家對潮來十二橋と、古來の風俗知るべし。」又潮來圖志曰ふ「常陸なる潮來の里は東都五町街に倣ひし廓なり。朝夕の出船入船落ち込む客の全盛は、花の晨雪の夕べ十六島はいふも更なり、香取、鹿島、息栖、銚子の浦々まで一望に浮み、富士筑波の兩峰は西南に連り、數十里眺望の好境なり。また西の入口に潮浪里と呼ぶ小坂あり潮のさし引ある故にさは名けしならん。爰より遊女町まで十余町、その間を淺間下とていや高き並木なり。潮來のばら／＼松とて沖乗船の目あての森とぞ。春は梅藤の名木、四季の眺めいと宜し。此所より霞ヶ浦信太の浮島手に取る如し。かく名高き妓樓も今は僅に二軒を存し、引手茶屋なるとの、多くも轉業して旅客商賣となりぬ。仙臺船の夥しく繋がれしといふ仙台海岸も今は名のみを空しく水圃の間にといむ。あやめ踊も衰へはて、遊廓の全盛今は既にむかしの夢なり。

或はいふ、「潮來出島のまことの中で」の唄は真正の潮來節にあらず、まことものは左の聲調なりと、「さり

くさん、お前のお足は細くて長くてぎつしり曲つて、それでなければ好きのところへヒヨコと飛ばれない」  
「小池小川は水がほりつめ、さぞやどぜう餅めだかめが天井向いて困るだる。」地に今も眞摺多し。

**稻荷山** 麻生、牛堀の小山につきたる小丘なり。老杉老松多く、頂上平地と成す。稻荷社あり。觀望宏濶、犬も賞すべし。まづ、正面に佐原の左の香取神社の森を遠望し、右は霞ヶ浦の末端より浮島の松山、左に當りて浪逆浦あり。浦の西方蘆葦の裡に斷續する大利根川あり。眼下に十六島あり。その他、帆影民屋ことごとく一眸の中に集る。

**長勝寺** 潮來町にあり。禪宗にして、文治元年源頼朝の建立に係り、佛殿も廣し。その他町の南に園部川あり。北利根の分流にして、流末延方村に至りて北浦に通ず。遊女園とこの流水との物語を傳ふ。

鹿島息栖の名勝を探らんとする旅客は、成田鐵道の終端驛佐原より利根川を渡るを便とすべし。佐原より汽船に乗れば、一時間餘にして息栖に至るべく、息栖より鹿島までは陸路五里に餘れど、汽船の便に由れば一時

間にして違すべし。

**息栖神社** 中島村大字息栖の水邊にあり。履中天皇朝の創建と稱し、處那斗神を主神とし、底筒男神、中筒男神、表筒男命及び猿田彦命の四神を配す。古へより鹿島神社に參拜するもの、必ず歩を迂る所たり。而してその華表は利根川に面し、景致最もすぐれたり。社には老木密生し、自ら幽邃の致を極む。華表の兩側、水中深くに男瓶女瓶の奇石あり。男瓶徑一丈銚子の形を成し、女瓶徑三尺形土器に似たりといふ。また、社の北方にして同村大字筒井の極樂寺に筒井淨妙の墓あり。

**鹿島町** 鹿島町の南方に位し、北浦の北岸大船津と相距ること十餘町なり。人家三百戸、高原の上におりて、淋しげなる町なり。大字宮中に著名なる鹿島神社あり。また、宮中の西吉岡に鹿島城址あり。

**鹿島神社** 下總の香取神社と相並びて關東の名祠に推さる。今、官幣大社に列し、舊常陸の一の宮たり。創建は神武天皇の朝元年と稱し、武甕槌神の主神とし、之に經

津主神及び天兒屋命を配祀す。本社は二層の瑞籬を透らし、拜殿その前に連なり神樂殿、奏者社は本殿の北に傍ら御供所はその西に接し、樓門の外に山神社、素盞鳴社あり。門内左右に龍神の二祠あり。その他寶庫、社務所、手水舎并に攝社末社等は境内に散在してその數幾干なるを知らず。本社を東南に距る一町許りの處に有名なる「要石」あり。圓き石の地上に顯はれ出ること二尺許にしてその頂きに凹處を存す。その四方に神籬を透らし、前面に華表を設く。傳へて曰ふ、地下に大魚あり、怒つてその尾を揮へば關東の地ごとく震ふ、故に鹿島の神々の石を以てその頭に釘し、再び撥動する能はざらしめたるものなり。而してその石の根底は深く地下に入りて窮むる所を知らずと。然れども地學雜誌に據れば「その圓滑の形狀、人工に成れること疑を容れざる所にして、地生の磐石に非ず。石質は細粒狀黒雲母花崗岩にして、筑波山北に産する建築石材にこれに類するもの多し。上古或は該地より此所に輸送し、墳塋の標示に用ゐるしものか。」「御笠山」は神社の周圍を繞れる丘陵の名にして、頂に御

笠神社あり。往古武甕槌神降臨して國內の惡神を討伐し給ひし時その御兜を埋めたる處なりと傳ふ。古松老杉鬱々として繁茂しその間處々躑躅と葛蔓の點綴するあり。風致神さびて頗る幽邃なり。山に「經石」の古跡をといむ。その他「御手洗水」は廣さ十間の清泉にして、玲瓏玉の如く、人能くその深淺を辨する能はずと傳ふ。また境の内外に七井戸、七不思議の名蹟あり。七井戸とは、染井、成井、辛柄井、清水井、保太井、寸府井、波左間井これにして、七不思議とは、要石、御手洗水、末無川、御藤、海の音、根上松、松の箸を稱す。「高ヶ原」は神社の東方一里に當れり。萬葉集「霞より鹿島の神をいのりつゝすみいくさにわれは來にしを。」小野湖山「維昔天兵征八蠻、遂將毳羯變衣冠、神祠穆肅千秋古、老樹蕭森萬籟寒、威烈長爲東海鎮、蒼黎久受泰山安、野巫喋々足荒誕、聖德因何窺一端。」

●根本寺 鹿島神社の西七町、大船津より四町餘の所にあり。推古帝の朝聖德太子の勅を奉じて草創せし所と稱し、高麗僧惠灌僧正の開山に係る。禪宗臨濟派に屬し、山

號を瑞穂山といふ。本尊瑠璃光樂師如來は傳へて聖德太子の作なりといへり。寺は近世の焼失後、修築せしものに係るを以て規模極めて狭少なり。然れども境内の風景、背後に翠巒を負ひ、前面浪逆浦に對するを以て甚だ清絶なり。世に當寺を鹿島一景の一に算す。

●藤原鎌足館址 根本寺の傍にあり。小字を藤原と呼ぶ。鎌足神社あり。傳稱して大職冠鎌足嘗てこの地に住せりと爲す。然れども正史のこれを徵すべきなく、たゞ詞林採葉抄にこの人の鹿島神宮に參詣したることを載せ、世繼物語及び下學集に鹿島郡の人なることを記せしのみなり。

●利根川下流 利根川の下總の木下より河口銚子に至るまで約二十二里の間を下利根川と稱す。常陸國にありてこの河岸に沿ふものは即ち稻敷、行方、鹿島の三郡なり。霞ヶ浦、浪逆浦などこれに通じ、最も汎濫を極む。霞ヶ浦の諸水驛、及び北利根川岸の牛堀潮來などより汽に船乗じてこの大江を下らば、水國の景情尤もすぐれたるも

のあるを見るべし。十六島の浪逆浦、息栖宮の大華表など最も情趣あり。蘆花、白帆、茅屋、鳥聲、宛がらに畫の如くなるを見るべし。且つ江に多く鯉を産し、秋季銃獵に尤も佳なり。土浦より麻生へ湖上六里、麻生より牛堀へ一里、牛堀より潮來へ同じく一里、潮來より息栖へ三里、而して息栖より銚子へ約六里にして達すべし。

●手子崎神社 下總の銚子と相對せる東下村字羽崎にあり。  
○水戸鐵道沿線其他 水戸鐵道は水戸市より久慈郡太田町に達する一線路にして、其の間に青柳、下菅谷、上菅谷、糠田、河合の五驛あり。附近の市街には額田の西一里餘に瓜連の一邑あり。太田の西二里餘に大宮あり。この地方は常陸北部の産物の多く集る所にして、且つ煙草鐵器等を多額に産するを以て商業活潑なり。

●菅谷村 那河郡の中央部にある小邑にして人口二千八百餘を有す。近年郡役所以下の官衙を置かれたれども、概ね農家にして茅屋多く街衢寂寥たり。二十五六町を隔て、佐野村大字稻田に東聖寺あり。新義真言宗に屬し、文安二年の開基と傳ふ。境内の



中央に樞の大木ありといへり。また、菅谷驛の西一里餘、國田村大字上國井に三國瀧あり。飛瀑甚だ大ならずと雖も、境甚だ幽邃にしてまた人意に可なり。俚俗傳へ言ふ初夏の候、杜鵑まづこの瀑水を嘗め而して後初めてその聲を發すと。水戸義公に詩あり。曰く、「聞説嗽流鵑始鳴。無端從此斷腸聲。奔泉飛過不歸去、瀉出蜀魂千歲情。」

常福寺 額田驛より西に一里二十町を隔て瓜連村大字瓜連にあり。淨土宗に屬し、草地山蓮花院と號す。太田の城主佐竹義篤の祈願所にして、延文三年の創建にかゝり、本尊阿彌陀如來は佛工春日の作なりと傳ふ。境内に諸建築相連接し、樹木多し。水戸より大宮を経て大子町に達する街道は瓜連を過ぐ。

淨神社 瓜連の西半里、靜村大字靜の山上にあり。健葉槌命を主神とし、式内の古社にして、今縣社に列す。境内一萬五千餘坪、地を帝靜山と稱し、杉檜陰に天を蔽ひ社殿門廡その間に鱗次し、うたゝ壯嚴を極む。然れども地僻に路遠きを以て、祭日の外、閑として賽客の跡を絶し、閑寂幽靜、真に神代にある想ありといふ。

太田町 久慈郡の東南部に位し、常陸北部の要衝に當る。水戸鐵道の終點驛なり。人口九千餘、町に富賈多くして商業頗る盛なり。蓋し、常陸北部の産物は一度この地に集合して、而して東京方面に輸出せらるゝを以て、貨物恒に市上に輻輳して商況最も活潑なり。されば常陸の人事業に失敗すれば、必ず太田に出稼に行くを例とすといふ。されど近年は少しく商業衰退の傾向ありともいはる。町に六銀行の設備あり。また郡役所區裁判所、中學校以下の官衙あり。名産として烟草及び鐵器をその最とすべし。名跡としては名高き西山の遺蹟、太田城址の他に、法然寺、淨光寺、蓮花寺あり。また、町の東方十數町幅村に延喜式内長幡部神社あり。南方佐竹村大字天神林の佐竹寺は、始め、花山院の御願によりて草創せしところといふ。なほ町内養福寺の境内に殉難碑あり。水戸より來れる國道はこの地を通じて磐城國棚倉町に達す。

太田城址 太田町の西にありて、最も古き沿革を有す。即ち、桓武の朝、坂上田村麿の創築と唱ふるところにして後承暦年間に藤原道延これに居りしが、三代にして佐

竹氏に滅ぼされ、爾後佐竹氏徒りて天平十九年まで代々の城地たり。而してその全く廢されたるは享和三年にありといふ。

西山 義公隱栖の地として有名なる西山の遺蹟は太田町の西方十町にあり。桃源橋を渡れば即ちそれなり。山勢崎嶇として風色幽邃なり。元祿三年光國國政を嗣綱條に譲り、自ら隱退を欲して地を求む。遂にこの地を得て大に喜び、館を營みてこれに居る。衡門茅屋質朴を極め、毫も村民の居と撰ぶことなく、老病廢疾のもの僅に數人を侍臣せして側に居らしめ、専ら書見に耽りたりといふ。現今存するところの家屋は、後年火災にかゝりたるものを再築したるものなりと雖も、悉く舊形を摸して作りたるものにして、一も恣にこれを改めたる所なしといふ。

久昌寺 西山と同村にして、譽田村大字新宿にあり。元祿年間徳川光圀の創建せし所にして、法華宗に屬し、開山を僧日忠といふ。境地、翠丘に據つて甚だ閑潔幽趣に富めり。即ち烈公撰水戸八景の一たる山寺の晚鐘の地たり。なほ序を以てこの附近の

名ある社寺を一括して擧げんに、同じ村に佐竹諏訪神社あり。東方譽田村字馬場（太田町の北）に佐竹八幡あり。同じ村北方字増井に正宗寺あり。

瑞龍山 太田町の北方一里にあり。水戸家累代墳塋の所在地として、藩祖威公（頼房）以後代々の藩主及び一族の墳墓皆なこの山の中にあり。葬儀は世に儒禮を用いたるを以て、墓制も皆な螭首龜趺馬鬣等の封石より成り、大に世俗に異なる所あるを見るべく、規模のまた頗る壯大なり。明の儒にして水戸藩に歸化したる朱舜水の墳墓もまた同じくこの地にあり。山麓には寶庫ありて、藩主代々の寶物を藏す。なほ、この附近の社寺を一括して掲ぐれば、山の下方に旌櫻寺あり。字澤山に耕山寺あり。東方里野宮に式内薩都神社あり。

太田町より北に至るに従ひ、多賀山脈の翠微漸く近く、二里半にして町屋と稱する一集落あり。これより里餘にして磐城の國境に至るべし。

玉簾瀧 太田町より北三里許りを隔て、町屋の北方にあり。傍の寺を玉簾寺といふ

瀧、水源を高鈴山に發し、曲流すること一里十八町、爰に至つて斷崖に懸れり。飛瀧高さ五丈八尺、幅三丈許、遠く望めば晶簾を垂るゝが如し。四度瀧、生瀧の瀑と共に常陸の名瀑となす。

西金砂山 久慈郡の中央に位する高山にしに金砂村大字上宮河内外二大字に屬す。海面を突出すること一千零八尺、上宮河内より登ること十三町許にしてその山嶺に達す。山上小祠あり、未だ祭神を詳かにせずと雖も、土人の傳ふる所に據れば東金砂山に鎮する者を男神に對して女神となすと。また東鑑を按ずるに治承四年十一月源頼朝佐竹氏を常陸に攻む、佐竹秀義金砂山の柵に據つて之を拒ぐと。而してその誌す東西の區別を明かにせざるが故に佐竹氏の柵趾果して孰れに在りしやを分別し難きも今地形等に據りこれを判斷するに是山即ち其遺墟ならんといふ。

東金砂山 西金砂山の東方に列し、天下野村大字天下野に屬す。直立一千百三十五尺、天下野より峻阪を擡づる十一町餘にしてこの頂に達するを得。満山樹木蒼鬱とし

て能く雷雨を起す。是を以て古へより常陸國の俚諺に金砂の雷は一國の雨と稱ふるに至れり。この山も亦山嶺に一小祠を鎮す。即ち西金砂山男神の神社なりと稱す。

水戸を發して正北瓜連を過ぐる國道は大宮町より山方を経て遠く久慈郡の大字町にいたる。その間大宮町に邊垂神社あり。袋田の東方に四度瀧あり。山方邊より道路はほゞ久慈川の流に添ふ。

四度瀧 袋田村月折の山中に懸る。高さ四十丈、幅二十四丈餘、飛泉岩頭に激して顆々珠を轉ばし、餘沫四邊に散じて霏々雪を吐く。風景幽にして且つ艶、眺觀時季を問はずと雖も、錦繡の候を以て第一の美觀と爲す。瀧の左方山崖の中腹に不動堂あり。堂は飛驒匠の造築と傳へ、不動像は雲慶の刀と稱す。西行法師以下この瀧に遊んで和歌を遺すもの多しと雖も。水戸光國卿の一度これを訪ふてよりその名ますく世に揚

れり。生瀧瀧 袋田村の東北二里、生瀧村大字小生瀧にあり。即ち四度瀧の上游にして、その高さ七丈、幅十三間餘を有し、下流は四度瀧となりて終に久慈川に入る。

●大子村 久慈川岸に沿へる道路上に位し、常陸最北部唯一の市邑なり。人口約三千七百、四面山を以て圍み、交通は甚だ不便なれども、近村産物の集合地なるを以て繁華太田町に亞ぎ、郵便電信局、小林區署などあり。蒟蒻を以て特産物となす。

●近津神社 大子町を距ること北方凡そ三里、黒澤村大字上野宮にあり。文武天皇の御宇慶雲四年の創建にして、面足命及び惶狼命を奉祀す。境内幽閑にして、前に八溝川の清流を控へ、背後に八溝山脈の峰巒を負ふ。樹木深く、社殿は神明造りにして南向して立てり。

水戸市より下野の東北部に通ずる街道は主として那珂川の右岸に沿ひ、八溝山脈の餘派なる丘陵の外縁の平野に臨める處を西北に指し、石塚水戸鐵道上菅谷より西方直徑三里野口(同上額田より瓜連を経て西方五里餘)等の諸集落を経て下野の國境に達し、それより二里餘にして煙草の名産地茂木に達すべし。その沿道附近に於て見るべきものは小松寺岩船神社野口町等二三に過ぎず。

●小松寺 水戸市よりすれば西北二里半餘、内原停車場よりすれば北方二里餘にして

達すべく、小松村字入野にあり。地に古塚を存す。方二間高さ四尺ばかり。傳へていふ、平貞能、重盛の遺骸及び寺佛を負うてこの地に隠れ、山上に一精舎を建て、削髮せりと。重盛の墓といふもの陸奥にもあり。孰れか真なるかを知らず。更にその西方西郷村字古内に清音寺あり。曹洞宗の名刹となす。

●岩船神社 石塚の北にあたり、水戸より四里二十五町を隔て、岩船村大字岩船にあり。伊弉諾尊の御子大鳥船神を祀る。社殿の左に一大石あり。上面凹低を成して形船に似たり。また兜石あり、その形狀を以て名け、俗に船社の神體なりと稱す。

●野口村 石塚の北にして、那珂川の岸に近く、水戸市より七里を隔てたり。壽命寺及び佐伯神社あり。壽命寺は親鸞の徒弟澤入信法師の開基なりといふ。同宗二十四輩の第十六なり。

○友部小山間 水戸市より下野國小山に至る鐵道は舊日本鐵道の一部たり。その間の驛名は赤塚、内原、友部、宍戸、笠間、稻田、福原、岩瀬、新治、下館、川島、結城、

小山これなり。その中赤塚、内原、友部は既に常磐線の部に説き、且つ結城、小山は常陸國外なればこれを省きて、宍戸より川島に至るまでの鐵道を中心としてその沿線地方を説かん。

宍戸町 宍戸停車場の南方に横はる。維新前は水戸支藩の封地なりき。今人口四千五百、佛刹に高乾院、新善光寺、唯信寺などあり。石岡町へ六里餘を隔つ。

笠間町 この沿線第一の都邑なり。舊牧野氏の居城にして、西茨城郡々役所以下の官衙あり。人口約八千、町に笠間稻荷あるが爲めに、旅舎も他に比して頗る宏壯にして、體裁の完備せるものあり。

胡桃下稻荷 停車場より十三町を隔つ。俗に紋三郎稻荷、或は單に笠間稻荷とも呼ぶ。この附近有名の流行神にして、遠近の來賽者多し。ことに二月初午及び十一月の祭日には東京管理局は特に參詣者の爲めに臨時汽車を發するほどなり。社宇また宏壯境内も幽邃なり。

城山公園 舊笠間城址なり。停車場より三十町を隔つ。山を佐白山と呼ぶ。園風景に富みて且つ櫻樹多し。

佐志能神社 同所佐白山にあり。一に三白權現、或は阿武權現とも稱せらる。延喜式内に列し、續日本紀に、仁明天皇承和四年三月戊子常陸國佐志能、神官社に預る。その神時に靈驗あるを以てなりとあるは即ちこれなり。東北の角に石倉と稱する所あり。奇岩突兀、老樹と石と互に雄を競ひ、頗る奇觀とす。

佛頂山 笠間町の西北にあり。日本名勝地誌曰く、「此山内村大字片庭佛頂山の中腹に大杉あり。この地にもと楞嚴寺と號する古刹ありて杉樹は同境内に屬せしものなり。樹の高さ五十間、周圍五丈餘、千有餘年を経たるものにて、里人古へより大杉大明神と稱し、饌を捧げてこれを崇拜す。」また、笠間町の東北一里、北山内村大字大淵に天神祠あり。

稻田神社 笠間の次驛稻田停車場より三町に過ぎず。俗に姫の宮といふ。奇稻田姫

命を祀れり。延喜式神名帳に新治郡三座とあるものは即ちこれなりといふ。藤原光俊  
康元の頃この社に詣で、和歌なり。曰く、「千早ふるこの神垣も春立ちぬこの川上は氷  
とくらし。」

西念寺（稻田御坊址）稻田神社の西にして、停車場より八町を隔つ。即ち稻田御坊  
は親鸞上人の草庵たりし所にして、實に一宗開立の基を始めし所なり。寺は中世兵火  
の爲めに焼かれしも二百有餘年前再興して以て今日に至る。門徒の最も神聖視する  
所たり。親鸞繪傳に曰ふ、「聖人、越後より常陸に越えて、笠間郡笠間郷といふ所に隠  
居し給ふ。幽栖を占むと雖も道俗跡を訪ね、法戸を閉つと雖も貴賤嚮に溢れ、佛法弘  
通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念忽ちに満足す。この時聖人仰せられて曰く、  
救世菩薩の告命をうけし古の夢、すでに今と符合せり云々。」

鴨御子神社 羽黒社とも稱す。福原停車場より一里を隔てたり。式内に列し、康平  
年間佐竹氏これを再興す。社に、後醍醐天皇宸筆の般若若經六百卷及び寶劍、軍刀等

を藏す。境地丘狀と爲し、里人はその岡を呼んで鴨山といふ。

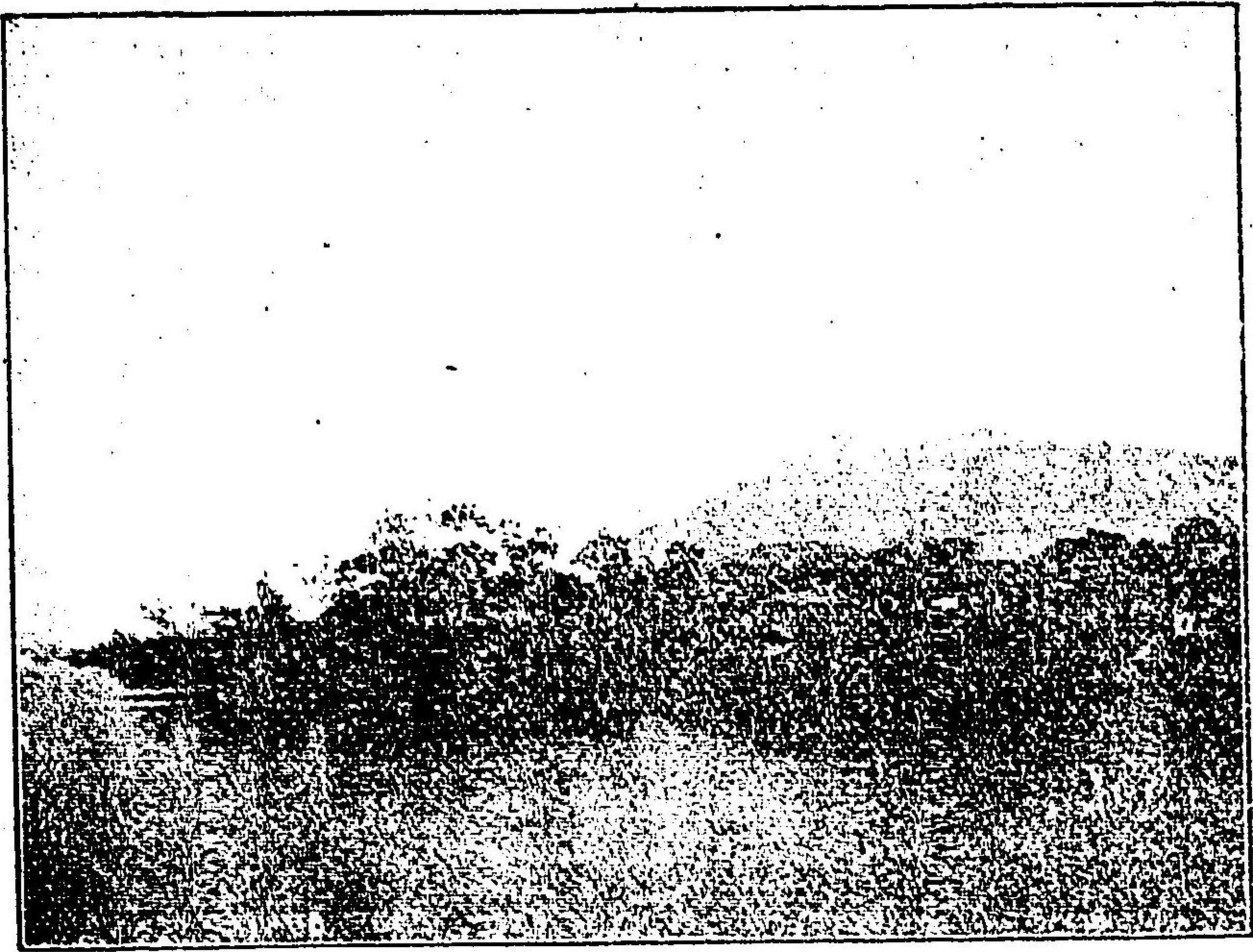
月山寺 鴨御子神社の西數町にあり。地を西小嶋といふ。天台宗に屬し、延暦年間  
の草創にして、慶長中僧惠賢これを中興す。本堂に慈覺大師作藥師如來を安せり。寺  
の前に櫻多し。山を望んで風景佳なり。

岩瀬驛 福原の次驛なり。小邑なれども、この地方特産の石材輸出地として繁盛な  
り。筑波山及び雨引山に登るものも、多くはこの驛より下車するを通例とす。

小山寺 岩瀬停車場より十六町を隔て、北那珂村大字富谷にあり。天台宗にして、  
天平七年、聖武天皇の勅願により僧行基の開基せし所なり。本堂、百観音堂、三重  
塔、仁王門、鐘樓、庫裏、籠堂等これに散在し、本堂には行基作十一面觀音を本尊と  
し、左右には慈覺大師作不動尊及び雲慶作の思沙門天を侍せしむ。而して三重塔は天  
平開創以來の古建築に係り、世の殊に珍とする所といふ。地位また丘に倚りて眼界甚  
だ開豁なり。

磯部の櫻 岩瀬停車場より二十町を隔て、東那珂村大字磯部に櫻林あり。櫻樹幾百株櫻川と擁して兩岸に繁茂し、花時の幽艶勝けて狀すべからず。櫻川は即ち謠曲に名あるところ、源を西茨城郡佛山の麓に發し、筑波根の西を洗ひつゝ、末は東に迂回して霞ヶ浦にそゞぐ。磯部はその源泉を距ること二里足らずの所にして、十餘里の流域に沿ひ最も花に跨る所、花時兩岸は花の洞門を爲す。また關東の一名境に推すべし。而して謠曲の櫻川に所謂磯部神社は今これを稻村神社といひ、天照皇太神、瀨織津姫命及び木花咲耶姬命を祀る。社傍に一碑あり。紀貫之の「いつよりか春べになれば櫻川波の花こそ間なく寄すらめ」の歌を刻す。

雨引山 岩瀬停車場より僅に半里にして達すべく、磯部よりは南へ三里足らずの路なり。道路、羊腸の坂路なりと雖も、勾配緩にして老幼の登山も容易なり。七十幾級の石階を踏み盡せば朱塗の山門、蒼然たる伽藍の前面に立つを見るべく、鋪石を渉る正面に巨刹石安觀音の棟高く虚穹を凌ぐを見るべし。觀音は即ち阪東二十四番の札所



山波筑るた見りよ川櫻

として參詣人多きことなり。附近にも老櫻甚だ多し。元來この雨引山は筑波脈山の一峰にして、平野の間に連亘せる同山の南より、北に至り、葺山、足尾山、加波山を望み次第に陵夷してこの雨引山を成せるもの、筑波、加波山など、並びて常陸の一名山に算せらる。雨引山より筑波山に向ひて南に下れば二里半にして眞壁町に達すべし。

加波山 日本山嶽誌曰く「加波山」

山は常陸國「眞壁、新治の二郡に跨る。眞壁郡樺穂村大字長岡より一里十四町、新治郡戀瀬村大字大塚より二十八町餘にして其山頂に達す。標高二千三百三十八尺」日本名勝地誌曰く、「此山に神祠あり。三枝神社と號し、俗に呼んで加波禪定と云ふ。毎年夏季信者の登山して之に賽する、日々數百人の多きに至るとぞ。又往年數千の兇徒此山に據りて不軌を謀りたるは、世の加波山事件と稱し共に知る所、今故らに之を詳記せず」。大日本府縣誌曰く、「滿山岩石多く、東西峻峻にして殆んど人馬を絶す。南部は危岩殊に多く、行導者の外至る者稀なり。俗之を禪定場と稱す。頂上三宮あり、本宮、新宮中宮と稱す。中宮は新治郡に隸す、滿山樹木繁茂し、溪間良材に富めり。山頂は喬木森々として眺望を障斷す、山尾櫻井の東に傳正寺あり。後峯天目山は頗る奇勝に富み眺望佳なり。

葦穂山 日本山嶽誌曰く「葦穂山は常陸國眞壁、新治ノ二郡に跨る。眞壁郡樺穂村大字白井より一里四町、新治郡葦穂村大字上會より一里三町餘にして其山頂に達す。

標高二千七十一尺。日本名勝地誌曰「四望快豁にして、東北に當國の半部を俯瞰すべく、西南に武、野二州の群山を眺観すべし」。大日本府縣誌曰孤峰嶙峋、危岩重疊せり。數條の溪水ありて、峯谷を瀾繞せり。坂路峻惡にして、躋登し易からず、山腹に平地あり、神供所、籠所を設く。頂上足尾神社を祀る。四望大に開け、東南は本州の半面を望み、西北は武藏、兩野の群山雲外に聳ゆるを見る。又本州の一勝地たり。登路白井より二十九町十二間あり。(古は加波山をも葦穂山といひしよし)行家「葦穂山花さきぬれや筑波峯のそがひに見れば雲ぞたなびく」眞淵「を筑波も遠き足尾も霞むなりねこし山こし春やさぬらむ。」

眞壁町 岩瀬停車場より二里半を隔て、筑波の山陰にあり。人口大字を合せ大約七千、附近村落の中心として街衢や、見るべし。清酒及び醬油を多額に産出し、また金鐵鑄物、生糸及び素焼の土器等の産出に名あり。大字伊佐々及び長讚村大字源法寺の間に伊佐々橋あり。筑波川(櫻川)に架す。橋上西南に富岳を望み、南に筑波山を仰





南の三面は水を繞らし、遠く筑波連山を望みて風景甚だすぐれたり。今一碑を止めて南朝忠士の遺跡を闡揚す。新篇常陸國誌の大意に曰、「興國二年北畠親房小田城を出で關城に遷るや、賊將高師冬從ひて之を合圍す。尋で僧圓琳を城中に遣はし和を勸む。親房答へず。是時に當り關東の地官軍守る所僅に六城、常陸を關大寶、伊佐、眞壁、中郡といひ、下野を西明寺と曰ふ。越えて翌々四年師冬賊兵を駈り、野草を搬運して關城の塹を埋め、又礦夫數人を募り、横に地道を鑿り棲櫓を穿ち、柵を門外に植ゑて嚴に官軍の出路を塞ぐ。官軍亦城中より地道を穿ち草を奪ひ柵を抜く、適賊の地道崩壊し礦夫壓死する者あり。師冬其策益無きを知りて之を罷む。先是親房屬書を結城親朝に與へて出援を促せども親朝躊躇して決せず、却て尊氏の甘言に惑はされて意兩端を抱けり。七月親房又書を親朝に與ふれども、親朝既に賊に通じ終に援を出さず。八月師冬大船を大寶沼に泛べ營を連ね黒子に達し、晨夕巡邏し嚴に水陸往返を斷ち、齊く起つて、關大寶二城を攻む。是に於て二城の聲息全く絶え官軍窮蹙す。冬兩城陥る

關宗祐及子宗政下妻政泰並に之に死す、親房逃れて吉野に歸る。於是伊佐眞壁中郡等或は降り。或は陥る。親房初めて常陸に上陸し、神宮寺城に據りしより、此に至つて前後凡六年、關城にあること五年なりと云ふ。」

下妻町 眞壁郡の西南にありて、下總の國境に接す。戰國の頃多賀谷氏の城きて居りし所にして、徳川氏の初には徳川頼房の初めて封せられし地なり。幕末に至つては井上氏領主たり。町内頗る廣濶なりと雖も、茅屋多く且つ商業振はざるを以て、市街甚だ殷賑といふべからず。人口約五千、諸官衙の他縣立中學校の設けあり。

光明寺 下妻町字城廻にあり。眞宗東本願寺末にして、開祖聖人留錫の所と稱す。もと附近小島(結城郡)にありしをこの地に徙せるものなり。境内樹木多く、本堂、庫裏、開山堂、鐘樓等ことごとく備はる。

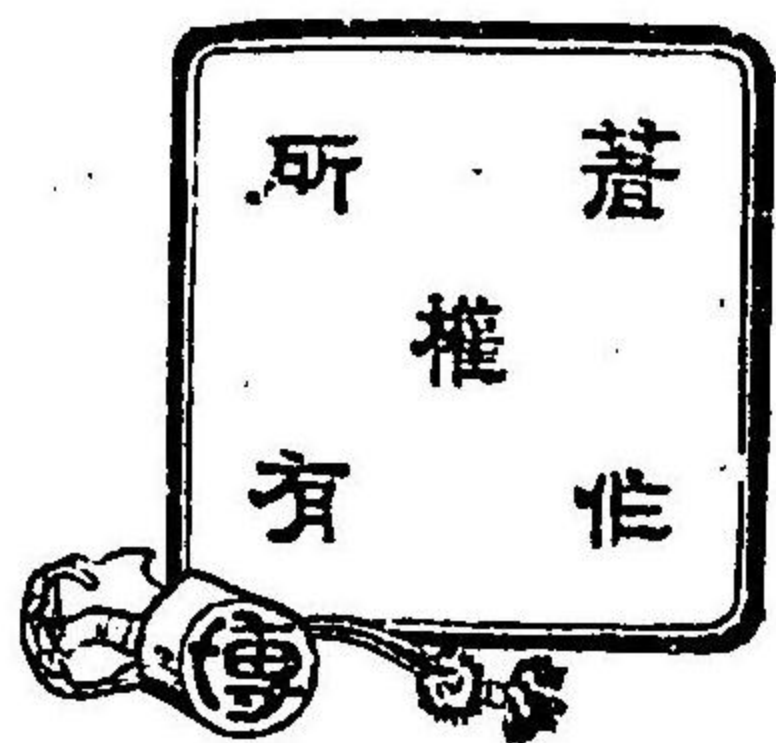
新選名勝地誌卷三終

明治四十三年十一月十日印刷  
明治四十三年十一月十日發行



（新選名勝地誌卷三 東海道東部）

定價金六拾錢



著者  
發行者  
印刷者  
印刷所

田 山 花 袋  
大 橋 新 太 郎  
河 合 辰 太 郎  
出版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區港町四番地

發行所

（東京市日本橋區本町三丁目）

博

文

館

區本町三丁目東京二百四十五番  
取置部用電話本局三六二〇番

田山花 新撰名勝地誌

全十二册

洋裝四六判總布上製裝釘頗美  
各卷銅版精密地圖及寫真版挿入  
紙數各册五百頁以上印刷鮮明紙質精良

正册 金六拾錢  
郵税 一册 金八錢

卷一 ● 畿内 (山代○大和○河内○和泉○攝津)

近畿地方の圖○京都附近の圖○奈良附近の圖○大阪附近の圖(銅版)

卷二 ● 東海道西部 (伊賀○伊勢○志摩○尾張○三河○遠江○駿河○甲斐○伊豆)

宇治山田附近の圖○名古屋地方の圖(銅版)

卷三 ● 東海道東部 (相模○武蔵○安房○上總○下總○常陸)

(銅版)東京、鎌倉及び其附近

卷四 ● 東山道西部 (近江○美濃○飛騨○信濃○上野○下野)

(銅版)宇都宮より日光迄沿道略圖及宇都宮市街圖(木版)長野市外二葉

卷五 ● 東山道東部 (磐城○岩代○陸前○陸中○陸奥○羽前○羽後)

(銅版)仙臺、松島、鹽釜總括圖及仙臺市、秋田市(木版)山形市、酒田町

卷六 ● 北海道 卷七 ● 山陽道 卷八 ● 山陰道

卷九 ● 南海道 卷十 ● 西海道 卷十一 ● 北海道樺太

卷十二 ● 臺灣琉球

本書の特色は交通路に由て名勝を記したる其一也  
産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたる事其二也  
つとめて新しき材料に依りてこれを記したる事其三也

旅行者の伴侶が爲めに紙質を精選し装釘を堅牢ならしめ其四也

最も特色は編者の足跡殆ん海内に洽なく探らざるなく従つて其記述

に最も精確を極めたる事是也各名勝地の寫真數十種を挿入し宛

を足其地を踏むの思ひあらしむるに於てなや旅行せんと欲するもの各地の名勝の分布を知らんと欲するものは來りて本書を見よ

博文館發行

博文館 旅行案内及紀行書類

坪谷善四郎君著	●改訂日本漫遊案内 <small>上下二冊</small>	風景寫真八十餘 各册彩色大地圖添	正價各金壹圓 小包料各八錢
神谷有終君編	●東海道車窓の名勝觀	全一册三六判美本 紙數二百七十五頁	郵正價金四拾五錢 税金六錢
伊藤銀月君著	●旅行者寶鑑	全一册三六判美本 紙數三百八十頁	郵正價金四拾八錢 税金八錢
八木柴三郎君著	● <small>學生必携</small> 修學旅行案内 <small>關東地方</small>	全一册三六判美本 紙數六百九十二頁	郵正價金四拾五錢 税金八錢
八木柴三郎君著	●修學旅行案内 <small>京畿地方</small>	全一册三六判美本 紙數四百二十頁	郵正價金六拾錢 税金六錢
坪谷善四郎君著	●世界漫遊案内	全一册四六判特製 風景寫真百餘個入	正價金壹圓七拾錢 小包料金八錢
香川悅次君著	●支那旅行便覽	全一册三六判美本 紙數六百頁	郵正價金四拾錢 税金八錢

醫學得業士 橋公行君著	●八丈島保養案内	全一册三六判美本 紙數百八十四頁	郵正價金貳拾錢 税金四錢
文學士 大町桂月君著	●關東の山水	全一册四六判特製 紙數五百二十頁	正價金壹圓 小包料金八錢
大橋乙羽君著	● <small>増補</small> 千山萬水	全一册袖珍上製 紙數七百二頁	正價金五拾錢 小包料金八錢
大橋乙羽君著	●續千山萬水	全一册袖珍上製 紙數六百五頁	正價金五拾錢 小包料金八錢
大町桂月君著	●一蓑一笠	全一册袖珍上製 紙數三百七十六頁	郵正價金參拾錢 税金六錢
大橋乙羽君著	●耶馬溪	全一册袖珍上製 紙數百五十六頁	郵正價金四拾錢 税金四錢
陸軍歩兵少佐 日野強君著	●伊犁紀行 <small>上巻日記之部 下巻地誌之部</small>	全一册新形特製 紙數百八十二頁	正價金貳圓六拾錢 小包料金拾六錢
巖谷小波君著	●新洋行土産	全二册新形特製 紙數百八十二頁	正價各金八錢 小包料各金八錢
新聞記者 松川水公君著	●樺太探檢記	全一册菊判美本 紙數百八十二頁	郵正價金卅八錢 税金六錢
文學博士 姉崎正治君著	●花つみ日記	全一册四六判美本 紙數百八十二頁	正價金壹圓參拾錢 小包料金八錢

帝國教育會編

發行所 博文館

# 世界現勢地圖

附錄  
○山高○海深○大河  
○延長○流域○面積  
○列國面積○人口比  
○較○列國貿易額比較  
○列國軍備

精巧銅刻着色にす引懸圖折圖調製赤道 軸仕立 正價金六圓 荷造料金拾五錢 送料實費  
比例尺二千五百萬分一 (縱三尺五寸 横四尺七寸) 映入 正價金五圓 小包料金拾六錢

## ●日本國史地圖

文學博士文學士 原秀四郎君著 菊判上製着色地圖百四十餘個 正價金壹圓七拾錢  
附註 日本國史地理百四十頁 小包料金拾貳錢

## ●中等國史地圖

文學博士文學士 原秀四郎君著 菊判上製着色地圖石版 正價金壹圓拾錢  
六十餘圖附錄百二十頁 小包料金八錢

## ●訂改日本商業地圖

理學士 吉田弟彦君著 菊判縱一尺二寸横八寸八分 正價金壹圓  
附錄重要統計四十頁 小包料金拾貳錢

理學士 吉田弟彦君著

發行所 博文館

# 地 文 學

全一冊 菊判紙數三百二十八頁  
並製正價四拾錢郵稅八錢  
特製五拾五錢小包料八錢

本書第一編は地球星學にして地球の成因太陽系地球の形狀及び大さ地球比重の測定地球の重力測定其他を詳説し第二編氣圈學としては大氣氣溫氣流大氣中の水分氣圈に於ける光の現象天氣及び氣候等を述べ第三編には海洋學第四編には陸圈學第五編には生物學編を詳述して巻を結ぶ

理學士 佐藤傳藏君著

# 地 質 學

全一冊 菊判紙數三百三十六頁  
並製正價四拾錢郵稅八錢  
特製五拾五錢小包料八錢

我地球は曾て如何なる有様を呈せしや現今如何なる有様に於て存在せしや其由來如何其構造如何等を脱き盡したるを地質學となすされば山岳の以て變ゆる所以泉河の以て流るる所以礦物の以て生ずる所以岩石の以て産する所以等は此書に依つて明かにするを得べし礦業に従業するも地文學の蘊奥を極めんとするも此書を讀まざるべからず

## ●政治地理學

並製正價金四拾錢  
郵稅八錢  
小包料八錢

## ●商工地理學

並製正價金四拾錢  
郵稅八錢  
小包料八錢

中

平岡樺太長官國府屏東君序 小川運平君著 發行所 博文館

# 滿洲及樺太

全一冊菊判紙數三百二十二頁  
清初全盛時 大地圖 挿入  
代北滿洲 二頁入  
圖一葉寫真版 小包料  
正 金九拾錢 金八錢

## ●滿洲樺太の根幹史料

樺太名稱考を始め、從來の學說を排して、嶄新卓抜の説を爲し、或は千古の疑を釋き、或は未發の秘を  
開き、唐代の以後千餘年間和漢の史乘を涉獵して、滿洲の地理歴史の概念より説きて、大陸と樺太の關  
係に及び、唐より金元を経て明清時代に到り、樺太に於ける日清勢力の交會期に筆を擱し、茲に於て、無文  
の窮島をして、今日始めて光輝ある樺太島史を續成したる、著者の著目自ら一般史家と異なるものあるを見  
て、本書の價値を知るべし、本書は滿洲樺太の經世政治家軍人にも必要なり、滿洲樺太の在住民族行  
家には缺くべからざるの寶典なり、東洋學術の研究者地理歴史學者考古文學者にも必須の參考書なり、  
附録したる黒龍江圖及明代北滿洲圖は讀書家の最も珍重する所なるべし

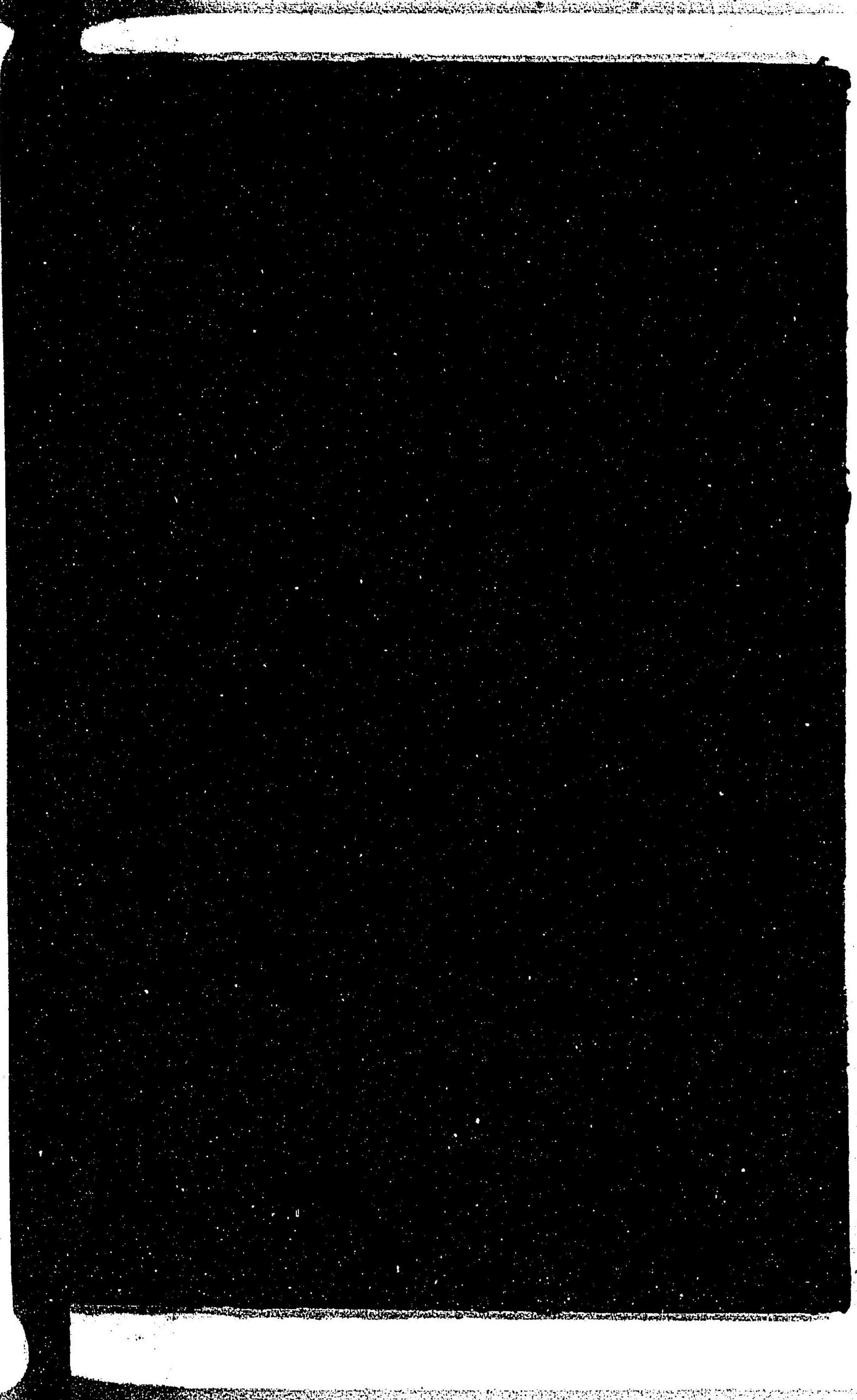
## ●滿洲樺太の經營論

47

72

132





72

432

